



三國七高僧傳圖會

附錄之卷

六

13
605
60





三國七高僧傳圖會附錄之卷目錄

聖德太子傳

第一 厩戶皇子降誕靈瑞並幼稚奇異

第二 蝦夷寇東鄙並魁帥絞糟感恩歸款

任那再興太子議論並秦河勝之傳

第三 河勝奏日羅素姓並吉備羽嶋渡百濟

日羅來朝謁太子並太子觀日羅相示劍難

第四 日羅密奏良策並德爾余奴刺日羅

日羅怨靈覆恩率參官等船

三國七高僧傳圖會附錄之卷目錄

第五

用明帝即審位並勅召沙門豐國
佛法渡本朝來歷並佛法興廢歷代

第六

物部守屋企叛逆並主上崩御
守屋與官軍戰淡河並守屋大連滅亡

第七

本朝女帝攝政之權與並太子經營四院

第八

太子定冠位十二階並憲法制十七條
帝請太子講勝鬘經並太子諸別為凶年之備

第九

太子薨斑鳩宮並葬科長御墓
驪馬悲鳴斃異鳥棲廟上守墓

慧慈與太子全日逝

皇太子廟內碑石偈

碼碯石識文

人王卅四代推古天皇三年乙卯三月土佐國の海上
 沈水香木漂海人らりて之を獻じ
 大に圖計長八尺三寸勅して
 觀音菩薩の像と彫刻せしむ
 同九年辛酉十月參河國
 鳳尾三枚と獻じ長一丈余
 とつく嘉瑞とす
 同十二年甲子三月越國
 白鹿小角の枝十七岐
 ありと奉じつとつく
 吉瑞とす



三國七高僧傳圖會附錄之卷

杓杞菴一禪居士編輯

○聖德皇太子傳

抑聖德皇太子と申奉る人皇卅二代用明天皇
三十一代欽明帝第四の皇子阿蘇敏達帝の弟崇峻推古二帝の兄なり
 第一の皇子なり母は穴穗部間人白皇后
天皇の異母小姉君の御女なり
 と稱じ其初三十代欽明天皇卅二年辛卯の一夜間人后靈夢と見ゆ其容は金色の沙門忽然として現れ告て云く我小世と救ふの願あり故に我が胎内と假下后大に驚き何人ぞまゝぬれやと問う我は是救世菩薩なり家西方小宮后曰妻身は垢穢ソごる貴人と宿し奉らんや沙門のまゝ我更不穢と厭ふ但衆生と濟度せんを欲ふの言已く后の口より飛入たまふ御夢さるぬ即ち夫より娠り八月と歷く胎内にて言聲外小聞ふ介後敏達天皇即位元年壬辰正月元日后ははらりと快くわはらふを許す乃

聖德皇太子之御像

皇太子有多名依
所生處故曰厩戶
用明帝愛之居上
宮故曰上宮八人
奏事一時善聽故
曰八耳又曰耳聰
或豐聰耳睿明仁
怒故曰聖德弘興
佛法故曰法大王
又曰法王云々



舍人調子磨

太子策驪馬騰空
三日乃降語人曰
我與雲霧直登富
士嶽遂東至陸奥
復北適信濃歷三
越而還云々



女孺と共小宮中と巡り遊覧しつゝ。積々厩の下ふりて。せやふ忍此地了
 おつゝ産の氣つきたまひ寢殿みつせり。隙々其処て即ち御安産なり
 れ耶の御惱も。誠小御夢の覺たる如く女孺の徒周章なり。御誕生乃
 皇子と抱き取。又后と必抱し奉り。寢殿み入らせり。此小宮中不陽也
 うく用明天皇此をたれ未だ皇子なく渡らせり。橘豊日尊と秘し御産平不
 やせり。聞しられ既産殿の邊み入らるると后の殿中と觀覽あり。小
 赤黄の光殿内と照し。其香宮中不薰し。凡大不異。尤右の侍臣み對ひ
 宣い。此兒尋常の侍あり。と。さう小湯沐さるべし。先湯と引奉り。か
 當今敏達天皇も殊更慮らる。御寵愛浅く。物也。此御子
 御身香潔。殿中み入れ。恰も梅檀の林み入る如く。又抱奉り。所の宮女その
 白い自ら身やけり。日と重なり。香氣散る。宮女たがひ詳ひて。奉り
 一と又厩下を降誕し。故御名と厩戸の皇子と稱し奉り。然るに。正月中旬

讚岐國より表と捧げ。一の靈あり。瓢と献る。群臣参内し。其奏する所と聞。同國羽
 香郡小縣主物部兄磨といふものあり。彼園み一株の椿あり。其下み忽然と一瓢の蔓
 生じ。次第み長くて花咲く。一の萼あり。二とみ。里俗たがひ奇といふ。と。でんと
 評し。間々一の瓢と結び。其形大不し。壺に似たり。諸人すも奇見。所不
 瓢の腹み人の形幾許もあら。其上み文字あり。是其人の名なり。又其余小秦の
 字あり。圖より文字とみ。一段高く。文字の勢。人物の妙に。いふ。名筆名画
 といふも。及ぶ所。非を國中。此と傳へ。見る者市より。時。一の神蛇。其
 長さ六尺。うらうら。現と来り。彼蔓と繞りて。瓢と守り。人と蔓み近づくと見
 られ。是と畏れ。敢て近する者なく。冬。小至と。瓢の蔓枯と。青々として。一葉も落
 ち。かく雪積れ。少くと凋す。曾て其地も去り。其折。小兄磨が家
 小牝馬あり。孕む。十二月。小師走。十五日。小産。此駒の形尋常み。か
 頭の龍の。背み鱗甲と生じ。生れ。乳とのま。園み出。彼瓢の葉と喰

南無佛と云ふ人あり。此の右の御手抄なり。舍利一粒掌心より出たり。其大さ菽粒の如し。
今尚法隆寺に有り 皇子五歳ある時。文筆の書法を學ひ。一たび筆を揮ひ。自然に筆法備へ。又諸の博士に經典を習せ奉る。一回教へしせば復といわたり。記憶したまひ。亦も其義理をよく識てなす。故に之を忠と云者なり。七歳ある時。奏して曰く。毎月六齋日。諸天國の政吏を檢察し。乞願ふ天下を。殺生を止むと。帝より聞召し。是を制し。天皇十年辛巳の。皇子十歳ある時。聰明日々益す。月日益す。一とて万と悟てなす。春二月蝦夷の國人共反す。既而東國の界所々乃地を侵し。劫り。寇をうと支甚し。邊境の早馬敷浪と打く。朝廷に注進せり。蝦夷の地は本朝陸奥國より東北の方あり。れる海中の島あり。此國人鼻の下の鬚長く。蝦と魚の状に似る。えみ。と云て。ハ詞の助あり。又蝦夷も昔の蝦と魚の状に似る。後世より蝦と諺り稱するものと。是より

蝦夷國も昔の蝦と魚の状に似る。夫と後ふる蝦と魚と唱へ。又誤りて蝦と云る。諸此國の皇國と海を隔て。一種の夷地にして其性も。勇悍なり。尤土地五穀を生じ。元北方の寒國なり。北方の國に近く。又カマドも通ず。とどろ程子秋の半より冷氣は。嚴寒の指と落を如く。故に五穀登。國人穴を穿つ。其中に栖。鳥獸魚鼈の肉を食し。鳥獸の毛を以て衣。又諸國の古著も著。親子兄弟を別。交合し。又諸の鳥獸と。射。其筆。と。毒藥。と。射。然る。上古より皇國に敵。十三代の聖主。景行天皇の御宇に。既而陸奥常陸の邊まで。侵。のれが國に班たり。小。皇子日本武尊。勅。吉備の武彦。大伴武日連と共。蝦夷を誅。その首將なる島津神國津神と。者。と。搗。な。夫。降参。皇國に伏せ。猶時々の蜂起。陸奥出羽に攻入。邊界を侵す。

借も蝦夷の逆乱注進せらる。朝廷に群卿もしく朝参あつて皆一統を奏し
 ういさる。蝦夷ひつしう稍もそれ王化に反て邊鄙の地と侵ると安んず速
 子誅戮を加はれ然るべしと申されふ。厩戸の皇子耳とて聞かざん。
 天皇よりひ奏し給ひりし小児の身とて國の大事と議せん。恐あふ似
 たりとて。若天兵と下さん。僅ふ千人二千人の首と断られ首たるとの五十人
 七十人と召捕れ一端に降参せしべけれど。年と経て又起ると有べし
 り。深く敵地に入ら。蝦夷の種類と盡せんとせん。不仁なり。兒意よりて
 思ふ。如何も。大毛人。一兩人と召せ。教諭を加へ重し盟と立させ
 後本國小放ちて。重く禄と賜る。心伏して永く背く。復候ふまじ。
 万一召せて考らるる時。誅を加はらる。遅りて下と奏し。ういさる。天皇甚
 歡感せし。頭て官兵と蝦夷下され。大毛人綾糟と帝都お召れ。詔と下して宣ひ
 る。往昔大足彦天皇の御代に。你の國とて。王化に属せし。ふし。誅と

加はれ殺せし。殺し殺し。赦とせし。赦し。なり。其時永く背き奉る。なり。なり。
 盟とせし。其後補も。朝庭小背く。なり。今。前例あり。首と切り。せし
 と有る。綾糟大。小恐と。若命と。助け。放ち。返ら。ひ。永く。盟と。立。背。せし
 奉ら。と。申。し。此。旨。許。容。あり。渠。此。時。泊。瀬。の。川。乃。中。流。に。於。て。水。と。浴。三。諸。の
 岳。の。方。に。ひ。ひ。口。瀬。と。盟。と。曰。く。自。今。子。孫。を。承。け。て。若。天。皇。に。背。奉。る。と
 あ。と。天地。の。諸。神。も。も。吾。蝦。夷。の。夷。種。と。盡。し。り。と。頭。と。た。れ。盟。と。斯。て。綾。糟。
 多。く。の。禄。と。賜。と。て。本。國。に。入。り。し。是。後。の。蝦。夷。永。く。背。き。と。あ。つ。し。
 ち。ち。誠。に。皇。子。の。聖。智。と。れ。り。と。官。兵。と。動。し。劔。戟。血。と。滌。り。ふ。あ。よ
 べ。僅。に。一。言。の。芳。思。に。伏。し。て。皈。ア。ぬ。又。十。一。歳。に。至。り。年。の。二。月。平。日。皇。子。の
 御。傍。に。侍。る。處。の。童。子。等。廿。六。人。あり。一。日。後。園。に。於。て。戲。を。拵。ひ。り。試。し。小。丸
 の。方。に。十二。人。と。立。右。の。方。に。十二。人。と。立。兩。陣。と。し。都。合。廿。四。人。の。童。子。に。汝。は
 声。と。育。り。銘。々。不。思。ふ。所。と。問。へ。と。宣。ひ。ん。べ。廿。四。人。一。同。ふ。声。と。長。く。一

短く。心々思々あり。戲言あり。國家の政事。又經典の中亦有其難問
 一奉る。不詳。不聞。や。分られ。彼が。所の如此。是が。問。所の斯。と。一々。尋る。所。不
 對。し。も。あ。り。こ。し。の。毫。末。と。誤。り。も。な。ら。ず。童子。と。も。大。不。驚。歎。一。家。不。歸。ま。く
 其。父。母。不。語。し。ん。れ。敢。て。實。と。や。べ。日。々。不。あ。ぬ。の。難。問。と。作。り。て。問。し。り。し。不
 叙。と。と。り。く。分。る。か。如。く。火。と。滯。り。く。條。理。明。白。たり。諸。人。い。よ。く。驚。き。誠。不
 神。不。通。じ。なる。皇子。と。せ。の。人。これ。より。豊。聡。耳。の。皇子。と。も。又。耳。聡。聖。德。皇
 子。と。も。申。せ。し。や。敏。達。天。皇。十。二。年。癸。卯。と。あ。り。西。蕃。の。諸。國。平。ふ。と。あ。り。
 急。と。告。る。事。も。あ。り。り。る。ち。ろ。不。先。帝。欽。明。山。崩。御。の。際。の。ご。と。當。今。聖。主。敏。達。天。皇。不
 對。し。仰。置。と。り。る。夫。任。那。國。の。往。昔。御。間。城。入。彦。天。皇。人。皇。代。宗。神。の。御。代。り。代。々
 朝。廷。不。仕。忠。と。は。く。一。度。と。背。く。と。か。り。と。新。羅。の。嗣。と。絶。し。今。あ。り。百
 濟。高。麗。と。新。羅。の。な。ら。ふ。勢。と。挫。げ。新。羅。獨。威。と。振。り。朕。も。も。し。新。羅。の
 切。り。たる。任。那。の。地。と。取。り。任。那。王。の。子。孫。と。り。其。末。と。與。さん。と。思。い。し。く

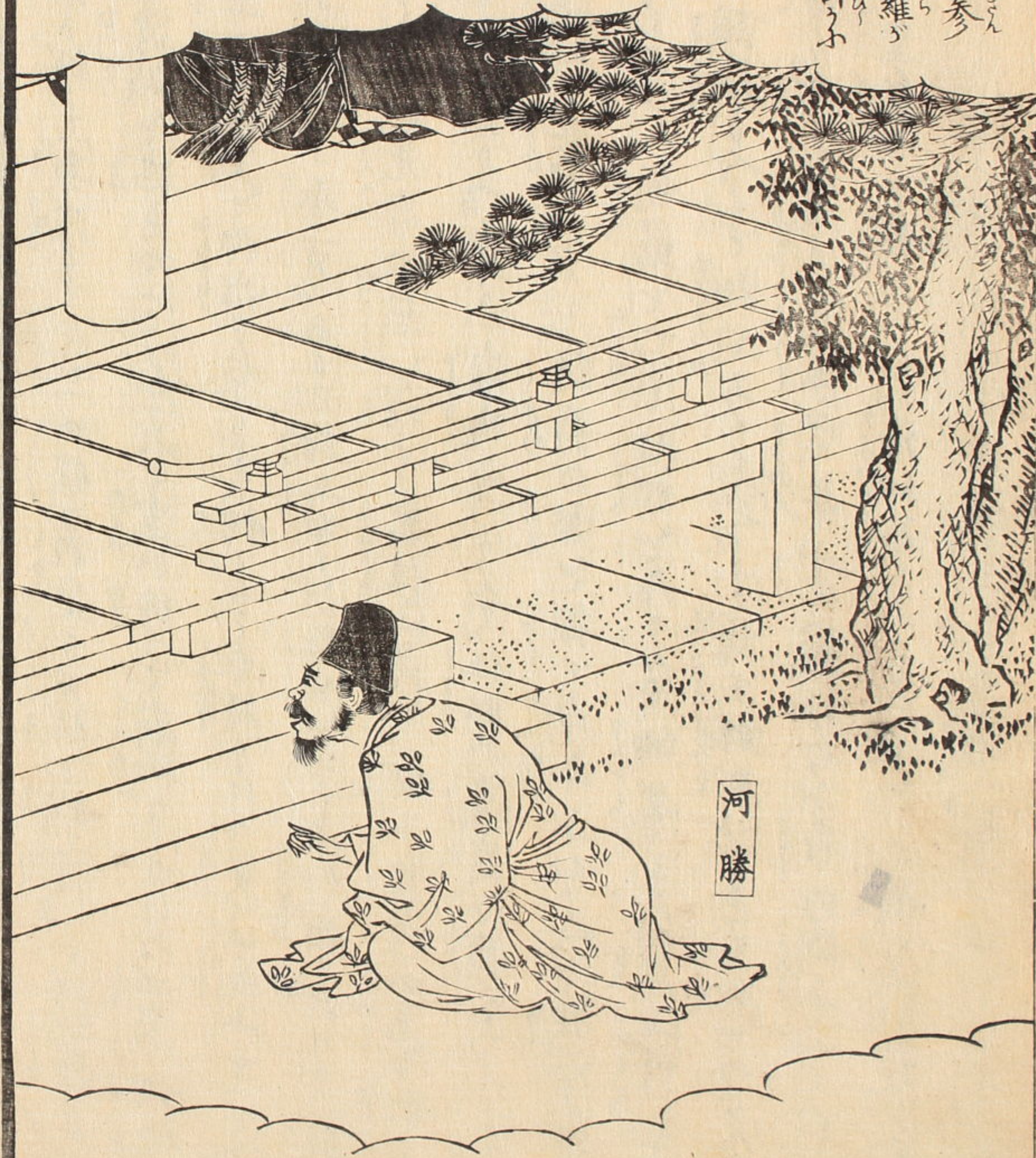
いと。果。さ。び。し。て。身。没。せ。し。今。二。の。恨。を。れ。皇。子。天。位。と。踐。て。後。一。と。び。任。那。と。與。し
 う。努。く。遺。誠。と。忘。さ。り。と。ふ。れ。と。宣。い。終。つ。て。山。崩。御。の。時。の。當。今。踐。祿
 ま。し。く。年。々。不。此。と。仰。出。され。し。も。何。と。う。春。秋。と。は。り。更。り。て。既。に。十。二。年
 と。と。成。り。る。今。年。春。二。月。あ。り。日。諸。王。と。び。群。臣。と。り。され。仰。出。され。り。る。朕
 不。德。と。り。る。先。帝。の。慈。と。り。る。審。位。不。昇。と。常。に。皇。考。の。恩。と。報。し
 奉。ら。る。と。と。り。る。あ。り。不。崩。御。の。ご。ん。で。任。那。の。遺。裔。と。興。と。り。し。を
 懇。不。遺。詔。と。蒙。り。あ。が。り。誅。罰。の。弊。と。顧。て。今。年。不。あ。り。と。う。朕。の。あ。る
 計。略。と。り。る。新。羅。と。亡。し。任。那。と。た。り。や。卿。等。と。は。思。ふ。所。を
 及。び。て。議。論。と。り。る。勅。問。あ。り。と。り。る。諸。王。群。臣。と。び。も。口。と。つ。て。ん。て
 一。言。も。あ。り。此。と。た。麻。戸。皇。子。當。年。十。二。歳。ほ。り。帝。の。側。あ。り。く
 くれ。天。皇。皇。子。と。顧。た。り。し。汝。幼。推。り。と。り。と。才。機。凡。夫。あ。り。す
 此。事。の。思。ふ。と。宣。い。し。る。皇。子。袖。と。合。せ。謹。で。奏。し。たま。い。り。る。ん

人皇三十三代欽明
 天皇の御宇に
 都を大和國金
 刺の宮に遷し
 三十三代敏達天皇
 の御宇に同所
 譯語田幸玉宮又
 磐余池邊雙觀
 の宮に遷りたり



三國七高作傳國繪卷六

秦河勝参
 内して日羅
 為人と詳ふ
 奏す



河勝

三國七高作傳國繪卷六

九

臣初幸るる上小不敏なり。如何して斯の如き御大事小預り申す。然れども黙して思ふ所と奏せざるに却て恐むあり。先此一義と度々の御変るるに賢才良智の臣と召され其計畧小従ひつらと宣ひかん臣兼る今百濟國の達卒日羅達卒は官名位三品と名者あり。才智諸人不勝れ兵と用ると玄妙不測の業あり。武勇も世に秀てつらと承とひ此の如きとされ勅問ありて宣ひん此の臣が父の尊の高祖の天皇の在位に坐せし時常々御側侍りし秦河勝と名る臣あり。渠日羅とてよく知り。河勝と召れて其人と為と聞し召さるべしと奏しつらと即ち河勝を朝廷に召しつら秦河勝の其父祖詳らるべし。欽明天皇二十三年壬午の歲秋七月丙子。天皇の御夢に一人の神人その狀天子の儀表あり。北面して天子と拜し我は是秦の政皇帝なり。我常小大日本國と名ふを願ふ。天皇の室國小来り皇帝の臣とらる國家の為小忠と奉と下し。我一人の臣あり其名斯大臣と申し彼先達て

此地小来り。今天皇の寵臣馬子の宿称とせらるりと申終るに御夢に聖朝上至つて博士と召し秦の政皇帝其臣小斯大臣と名者あり。詳ら考つと勅命あり博士謹て奏し。政皇帝と言侍らば然とて秦と名る之の熟考する秦の始皇帝あり。始皇帝の諱と政と申斯大臣の李斯と名あり此人指書と作らり。決して是と申はと申は。天皇始て悟りけし甚に怪し事小思召りつら此日より大雨降るるを篠と投る異らべ七日の間少も止らあら。是小依り洪水漲り出る八日ふしく雨止る。此時泊瀬川おびたしく水溢る。三諸の丘の麓大崩出。忽然として崩とらる地より一の大甕とら出。三輪の社の廣前よりして止る。村民等是と見附り群集と見ら小口より甕とら。こい怪しと甕と傾け伺い。こい甕の裏小嬰兒の泣声聞えら。諸人驚れおそれ皆々甕と捨て外より。やがて天聽小達し速く小携来と下し。勅ありん。甕と階下に奉る。天皇

最前（三）不靈告（レ）感（レ）給（レ）ひて（レ）。既（レ）九日（レ）有司（レ）不課（レ）セウの瘡（レ）と破（レ）く
 敵覽（レ）あふ一個の男子（レ）あつれ出（レ）たり。其容（レ）瑞正（レ）して。面（レ）ハ素玉（レ）のごとく
 群臣（レ）おのく怪（レ）まじび（レ）て（レ）。此（レ）天皇夢中（レ）の奇異（レ）と語（レ）らせり（レ）。是（レ）彼
 政帝（レ）とんと養育（レ）と加（レ）つひ則（レ）姓（レ）と秦（レ）と（レ）。河（レ）より出（レ）る理（レ）とて以（レ）て
 河勝（レ）と名附（レ）たま（レ）成長（レ）あま（レ）ひ才智（レ）俊敏（レ）とて世（レ）勝（レ）と誠（レ）希代（レ）の智
 臣（レ）たり。後（レ）欽明天皇（レ）この河勝（レ）とて（レ）。厩戸皇子（レ）の御父用（レ）明天皇（レ）不附（レ）
 せのい。余（レ）後（レ）厩戸皇子（レ）不（レ）從（レ）ひ奉（レ）と云（レ）々
 新撰（レ）姓氏錄（レ）不（レ）秦（レ）始皇帝（レ）三世（レ）不（レ）あ（レ）りて考武王（レ）とく人（レ）あり。其子功満王（レ）
 者仲哀天皇（レ）の八年（レ）不（レ）我國（レ）の化（レ）とて（レ）。此（レ）時功満王（レ）不（レ）附（レ）後（レ）来（レ）る民
 二十七縣（レ）の人其數（レ）とて（レ）。是（レ）等の者金銀帛玉（レ）の類（レ）いと献（レ）と皇國
 不（レ）と（レ）。此輩（レ）蠶（レ）と養（レ）ひ絹（レ）と織（レ）の速（レ）う法（レ）と教（レ）めり（レ）。仁徳天皇（レ）
 御宇（レ）不（レ）あ（レ）りて彼等（レ）と諸郡（レ）不（レ）分（レ）ち置（レ）ひぬ。然（レ）る（レ）。後（レ）綿絹（レ）の類（レ）と（レ）。

帝（レ）不（レ）献（レ）とて（レ）。綿絹（レ）ハ能人（レ）の肌膚（レ）暖（レ）し（レ）と（レ）。其功（レ）と賞（レ）たまひ。
 功満王（レ）の裔（レ）不（レ）波多（レ）とて姓（レ）と賜（レ）ひぬ。是（レ）あ（レ）りて秦（レ）の字（レ）も（レ）と（レ）訓（レ）とてや
 秦（レ）氏（レ）太秦（レ）氏（レ）とて同姓（レ）とて河勝（レ）も其裔（レ）の如（レ）く聞（レ）ゆとて
 又聖徳太子（レ）ハ秦（レ）の河勝（レ）と怪生（レ）して。十一歳（レ）あ（レ）りて年（レ）誕生（レ）し（レ）。十二歳（レ）不（レ）
 くと又太子（レ）の側（レ）と離奉（レ）りて其上（レ）太子降誕（レ）の時（レ）も（レ）。讃岐國（レ）兄磨（レ）が家
 より献（レ）とて。靈妙（レ）の飄（レ）ふ。秦（レ）の字（レ）忽然（レ）と現（レ）と深（レ）所以（レ）ある事（レ）とて
 一説（レ）不（レ）河勝（レ）大甕（レ）の中（レ）怪生（レ）とて（レ）。此（レ）先秦（レ）漢（レ）をび
 三韓（レ）の人。時々来朝（レ）して皇國（レ）不（レ）と（レ）。佐（レ）とて（レ）。秦（レ）氏（レ）漢（レ）氏（レ）百濟（レ）氏（レ）
 等（レ）より人王（レ）廿二代雄略天皇（レ）十五年秦（レ）の酒公（レ）不（レ）姓（レ）と賜（レ）つて。宇都麻佐（レ）
 不（レ）蓋秦（レ）の河勝（レ）も亦其秦（レ）氏（レ）の苗裔（レ）とて人乎（レ）。河勝（レ）性質（レ）敏悟（レ）とて異域（レ）
 舞樂（レ）と習得（レ）とて。聖徳太子（レ）不（レ）從（レ）とて和学（レ）と作（レ）。凡（レ）樂家（レ）者流（レ）河勝（レ）と

祖と。又一書小河勝後終小自ら小船小乗く西海小泛び播摩の浦小著す
 其形相不生不死の如し里人以て奇怪と尋ふ赤穂郡坂越小終る則ち神
 祝ひ祠とまゝ之と祭る。今大酒の神社と号ひ或云々。後冷泉帝治曆四年
 正一位と授く。當社の縁起天和二年。吉田卜部兼連の筆と見たり
 去程小河勝ハ召小隨ハ参丹ハ。謹で階下ハ平伏セリ。中臣勝海の大夫勅と奉て
 河勝小對ハ主上先帝の御遺誠小有り。新羅誅伐の御氣色あり。夫ハ百濟國
 の日羅ハ才機軍略衆小起ル事也。敵聞小達シ。汝往昔故あつて日羅人ハ爲て
 相とく。即今日羅と以て將軍小并セリ。新羅誅伐と任セリ。於て
 其功と顯ハ。詳小奏聞セリ。有る。河勝砌下畏て。臣等ハ幼稚の
 時百濟國の調使本國へ歸る。砌護送使の人小隨ハ彼國の日本府小至り日羅
 交り。元九年。日々小教と兼。才機人ハ爲て能存知候。元來此人ハ吉備津彦
 の命の男三井根子命の末葉也。代々肥後國小住。葦北の國造阿利斯登子

三

ケリ阿利斯登ハ小世瀬稚小雀天皇武烈天皇の御事の御代百濟國の宰とて彼國へ
 渡り。彼土に於て官人の女と妻。日羅ハ産。其後阿利斯登ハ任とて本國小歸り
 其妻小日羅と与ハ彼國小残。置本國小還。夫ハ日羅百濟小在。人と成
 晝夜書籍小眼と。普く天下書と。その見。事。故小國王の爲り
 抽んで用ひられ官達卒小任。國の政事小預。智謀人小起。力量あり。と
 奇異甚。多く。第一渠。身。光。放。熟。時。側。伺。見。小。全
 螢火の眼赫。人と面。見合。眼。中。金。光。直。小。人。の。眼。と。刺
 如く。其余人の相と觀て。吉凶禍福と告。違。世。小。珍。人
 人物あり。勅。召。未。朝。若。新。羅。誅。伐。の。儀。と。勅。一。渠。究。め
 て。思量。具。日。羅。德。と。奏。物。部。守。屋。大。連。藤。我。馬。子。大。臣。小。仰
 て。勅。書。と。作。ら。御。喚。使。紀。伊。國。造。押。勝。吉。備。の。海。部。直。羽。嶋。兩。人。と。下。れ
 り。余。後。押。勝。羽。嶋。百。濟。一。還。臣。等。彼。國。小。至。勅。旨。と。宣。百。濟

王日羅賢者くわにんとて若ハ朝廷てうていにあがりて還かへりて事ことと察さつしりてあやふ。臣等しんらう累かさね々かさね論ろんしていふ。固かたく辭ことば一いつ敢あやく承うけ伏くつ仕つからばと奏そうしり。天皇てんかうはあく香かうしく思おもひ召よれ種たぐひ々たぐひ叡えい智ちといふ。重おもりて羽嶋うのしま一人ひとりに仰おほ含くみりあひ。汝なんぢ竊ひそか彼かの土つちに渡わたり何なにもいて日羅にらが家いへに訪まひ。朕みづか賢けんと慕あこぶの實じつと告つげば渠かれ我國わがくにの思おもひ思おもひいて恐おそく来きらんも量りかく。何なにと對たい面めんして其その志こころと伺うかひ来きると密ひそ勅しつふまはし再またび韓かん土つちに渡わたりり。今いま般ぱん唯ただ何なにといふ。百濟ひやくせいの日本にっぽん府ふの内うちに逗留とちゆうす。或ある日ひのびやふ日羅にらが家いへにあり。門かどに五ご裏りのうすすと伺うかふ所ところに一人ひとりの韓かん婦ふのまはし門かどの裏うらより出で来き韓かん語ごを言いふ。汝なんぢ根ねと我われ根ねの内うちへ入いり言いて其その終はつ末まつ入いり。羽嶋うのしま其その意いを悟さとす。婦めづ人の蹟あとをあつて入いり。三さん韓かん語ごをいふ。去い来き我われのまはし隨まりて入いり云いふと我われ根ねに汝なんぢ根ねと入いりて聞きえり。實じつにいふまはし語ごをいふ。此この時とき日羅にらの堂どうと下くだり。羽嶋うのしまと迎むかひ再また拜まつす。其その後のち一いつ面めんに座ざをあつて日羅にらが聡そう明めい愛あいふまはし於おて儼げん然ぜんといふ。其その身み家の裏うらに在あり。羽嶋うのしまが勅しつ使しして門かど外がはに來きりいひて識して人ひとと出でりて語ご入いり如ごとく此この態たい懇こん

小禮せうらいといふと神かみに通とほぐといふ。此このは羽嶋うのしま天皇てんかうの密ひそ勅しつと演えん説せつす。懇こんみ本ほん國こくに求もとめりて告つげり。日羅にら再び日本にっぽんの方かたに向むかひ思おもひと謝あやす。臣しん父ちちといふ。天朝てんてうの初はつに我われ幼こ稚ちりて父ちちの為ため異い域いきに捨すられ日々日々本ほん國こくを慕あこぶ。何なにもいて骨ほねと日本にっぽんの地ちに葬まうさんと希ねがふ事こと年とし久ひさし。天皇てんかう臣しんと召よさんまはしりて禮らいを以もつて召よす。時ときに幾いく回かい勅しつ使しと賜たまはる。百濟ひやくせいの群ぐん臣しん敢あやく臣しんと奉ほうらり。勢せいといふ。徴ちやくといふ。速すみに承うけ伏くつ仕つからば。一いつ々たゞ謀まうしていふ。羽嶋うのしま歡よろこびいふ。地ちを猶なほ閑かん談たん時ときと移うつりて歸かへり。是こゝより羽嶋うのしま日羅にらが教けうを隨まひいて數かず日ひの後のち百濟ひやくせい王わうにあがりて。臣しん已いまに帝てい都とに歸かへり大王たいわうの言ことばといふ。復また奏そうしていふ。我われ天皇てんかう大たいに逆さか鱗りんす。往むか昔むかし先せん帝てい在ありて位ゐ乃なり日百濟ひやくせいとて新羅しんら王わうにあがりて。天朝てんてうの威いといふ。新羅しんらと挫くぎ。餘あま昌しやう王わうとて百濟ひやくせいの王わう統とといふ。今いま其その天恩てんおんと忘わすれまはしり。勅しつと背そむき日羅にらと渡わたり。何なにの道理だうりぞ。若ごとく勅しつ命めいに應おこずまはしり。筑紫ちくし國くにの勢せいといふ。立たつまふ百濟ひやくせいと誅しつ伐はつせり。十分じふぶん威い儀ぎと正ただしく申まをす。元末げんまつ百濟ひやくせいの柔なや弱じやくなる國くに風かぜ也なり。天皇てんかう乃なり

逆鱗と聞て君臣恐怖して顔色をうらうい俄に思卒思卒ハ官名之百濟子也徳介徳介ハ名也余奴余奴ハ名也哥奴智哥奴智ハ名也参官参官ハ官名也徳卒徳卒ハ官名也次于徳次于徳ハ官名也使使ハ官名也と一柁師水主影柁師水主影ハ官名也漆漆ハ官名也頃て日羅とて羽嶋羽嶋ハ官名也請て同船同船ハ官名也乗せ皇國皇國ハ官名也て發船發船ハ官名也と成りて斯て海上數日と経て同年七月吉備の児吉備ハ官名也と糟手子連糟手子連ハ官名也と見嶋見嶋ハ官名也下れ日羅と迎て難波の館難波の館ハ官名也入り又阿部の目臣阿部の目臣ハ官名也と物部贄子の連物部贄子の連ハ官名也と難波の館難波の館ハ官名也下れ日羅日羅ハ官名也及び護送の人々護送の人々ハ官名也不饗宴不饗宴ハ官名也と賜ふ是彼輩海上遙る地と凌凌ハ官名也と未未ハ官名也と勞勞ハ官名也と慰問慰問ハ官名也者者ハ官名也鳴呼鳴呼ハ官名也字字ハ官名也と文字の道文字の道ハ官名也ひや人々腹腹ハ官名也文字文字ハ官名也の譬譬ハ官名也米袋米袋ハ官名也の如如ハ官名也とつる是等のと日羅日羅ハ官名也と外國の賤官外國の賤官ハ官名也と皇國の人の子皇國の人の子ハ官名也奴隸奴隸ハ官名也と召召ハ官名也と可可ハ官名也と如此重禮如此重禮ハ官名也と迎迎ハ官名也たまへと實学實学ハ官名也内内ハ官名也備備ハ官名也と徳外徳外ハ官名也と溢溢ハ官名也と故故ハ官名也と日羅日羅ハ官名也難波の館難波の館ハ官名也未未ハ官名也と未朝廷未朝廷ハ官名也召召ハ官名也と其故其故ハ官名也此項此項ハ官名也新羅國新羅國ハ官名也

調貢の使来都調貢の使来都ハ官名也都都ハ官名也ありて歸歸ハ官名也天皇天皇ハ官名也前前ハ官名也新羅の任那新羅の任那ハ官名也と七七ハ官名也りりハ官名也と深深ハ官名也と憎憎ハ官名也と恒恒ハ官名也新羅新羅ハ官名也と伐伐ハ官名也任那任那ハ官名也の後の後ハ官名也と思思ハ官名也召召ハ官名也と自然自然ハ官名也日羅日羅ハ官名也と召召ハ官名也彼國の貢使彼國の貢使ハ官名也小洩小洩ハ官名也聞聞ハ官名也え朝廷朝廷ハ官名也日羅日羅ハ官名也と召召ハ官名也と新羅誅伐の計策新羅誅伐の計策ハ官名也と回回ハ官名也れん為るれん為るハ官名也と遠慮遠慮ハ官名也と時時ハ官名也の後の患後の患ハ官名也と慮慮ハ官名也と渡渡ハ官名也と日羅日羅ハ官名也と密密ハ官名也小畔小畔ハ官名也戸戸ハ官名也の粟市粟市ハ官名也の館館ハ官名也推古天皇推古天皇ハ官名也の紀紀ハ官名也阿斗阿斗ハ官名也の河辺河辺ハ官名也の館館ハ官名也と小移小移ハ官名也とこれ新羅の使新羅の使ハ官名也帝都帝都ハ官名也と退退ハ官名也と待待ハ官名也て朝廷朝廷ハ官名也小迎小迎ハ官名也れんとのさとのさハ官名也と此此ハ官名也所所ハ官名也の皇子皇子ハ官名也日羅日羅ハ官名也難波の館難波の館ハ官名也粟市粟市ハ官名也小移小移ハ官名也と居居ハ官名也と聞聞ハ官名也ややハ官名也何何ハ官名也ももハ官名也見見ハ官名也思思ハ官名也れれハ官名也と竊竊ハ官名也と迎迎ハ官名也臣臣ハ官名也と俱俱ハ官名也小粟市粟市ハ官名也小趣小趣ハ官名也と折折ハ官名也と日羅館外日羅館外ハ官名也へ出出ハ官名也と風景風景ハ官名也と道道ハ官名也遙遙ハ官名也と是是ハ官名也と見見ハ官名也んと牧牧ハ官名也撞撞ハ官名也の侍侍ハ官名也の群群ハ官名也と集集ハ官名也と居居ハ官名也と皇子皇子ハ官名也と小鹿布小鹿布ハ官名也の單單ハ官名也と召召ハ官名也りて熊熊ハ官名也と御面御面ハ官名也と垢垢ハ官名也と跡跡ハ官名也と小小ハ官名也ややハ官名也繩繩ハ官名也と以以ハ官名也て帶帶ハ官名也と馬飼馬飼ハ官名也の童童ハ官名也と俱俱ハ官名也小立小立ハ官名也列列ハ官名也坐坐ハ官名也と日羅日羅ハ官名也の皇子皇子ハ官名也と見奉見奉ハ官名也と急急ハ官名也と左右左右ハ官名也の者の者ハ官名也と御御ハ官名也のけのけハ官名也忽忽ハ官名也ち御衣御衣ハ官名也と取取ハ官名也止止ハ官名也と躡躡ハ官名也踏踏ハ官名也と并并ハ官名也と皇子皇子ハ官名也の御供御供ハ官名也侍侍ハ官名也と群群ハ官名也臣臣ハ官名也日羅日羅ハ官名也禮禮ハ官名也と奉奉ハ官名也と見見ハ官名也と互互ハ官名也

四

子相顧。恐驚。度。日羅の曰。君正。天皇の皇子。坐。如何。故。卑賤の牧童。群。又。御手と取。館中。請。奉。皇子。今。御衣と更。日羅。對。宣。我。當今の御甥。庶子の皇子。卿。才。凡。夫。由。傳。愛。來。果。汝。凡。眼。驚。日羅。又。拜。皇。子。日羅。面。眈。度。觀。今。卿。面。相。を。須。臾。皇。子。日羅。面。と。眈。度。觀。多。い。今。卿。面。相。を。見。正。人。の。為。害。非。命。の。死。と。免。色。あり。宣。慎。日羅。笑。臣。幼。年。此。相。知。更。死。と。顧。吉。凶。禍。福。天。受。得。所。の。數。あり。伯。夷。叔。齊。如。賢。人。猶。餓。死。況。や。其。余。某。属。の。凡。人。何。惜。且。比。答。誠。皇。子。の。明。神。通。如。果。日羅。奸。人。の。刺。蒙。其。年。と。越。死。新。羅。國。の。調。貢。使。の。程。帝。都。と。辭。退。日羅。と。桑。市。召。王。座。

迫。進。渠。容。負。と。敵。覽。兩。眼。炬。と。列。如。耳。珠。と。無。美。髻。腹。人。物。甚。勇。壯。潜。龍。の。雲。中。伸。如。此。馬。子。宿。称。以。政。の。大。吏。並。任。那。國。與。新。羅。亡。計。策。と。勅。問。日羅。合。掌。奉。陛。下。天。下。と。平。皇。統。連。綿。乃。代。々。朝。恩。と。蒙。仁。智。深。人。勅。向。又。任。那。國。を。役。新。羅。と。伏。ヤ。給。人。賢。人。と。招。思。罰。と。者。民。食。と。足。兵。思。澤。朝。威。仰。民。調。貢。と。進。士。死。と。顧。水。火。の中。入。身。思。死。皇。國。軍。鼓。の。声。と。聞。誠。富。栄。如。斯。三。年。其。後。軍。船。糧。船。と。作。筑。紫。及。び。諸。國。の。津。浦。重。小。備。置。三。韓。と。誅。伐。其。勢。と。張。三。韓。渡。來。調。貢。使。自。然。と。見。懼。れ。慄。本。國。小。歸。此。三。韓。王。告。其。時。智。臨。氣。應。慶。と。察。し。



聖位太子



太子日羅不
對面して劍
難の相あり
みごと告
う

日羅

勇烈火の中ふありと恐れ辨へ人の心と動と云良臣と撰ひ其人とて一番
 百濟國餘昌王と召さるべし若来ふる時其子太佐皇子或高官の者と召れ
 来るは禮と厚くし禄と重くし以来王自ら朝参するも能はば王子親
 戚と云く三年ば皇國小参朝し交々質とて来と云く嚴重勅しり
 他り心以傾け従ひ奉らんと誓ふは高麗王も諭して召さるべし高麗國も百
 濟國と齊しく柔弱の國風ふる速来と云く若又来ふる時王子大臣
 の中と召され百濟高麗志と同一と朝廷小伏と云く不於て良將一人と云く
 新羅國小遣くめし速小任那の地と還し任那と云く勅しり新羅
 命小復して任那の地と朝廷へ還し奉ら其は豪傑一人と撰ひ固任那
 國と持を如此と彼國の先王の裔と云く云く臣聞任那王の裔今
 亡びて一人と血脉あるも然らば任那と持つ大將も久く彼國小置
 給はば僅小三年と限りて別小忠義をばびり良將一人を渠ふくと

遣はるは是より代く任那の代番と定り三年と一任と云く又任那の番將小赴
 者小の妻子と遣はるべし自然彼國の女子媼も云くあは嚴罪小處せらるべ
 旨法令と定めめし任那の地へ全く皇國の有と云く諸又新羅王も兩國
 の如く召され来ふる時其も王子倍臣の内と召され後小倍臣と質と云
 くと止りつと三國の太子たる者と招きなむし三國交代して一王の國小置れ
 二王の皇國小止らめし是亦の三年交りて交退せらる元来百濟高麗の
 柔弱なる國風ふる速く敢く勅と背くと侍る事新羅の人氣勇壯なる
 あり究りて一番小背くと候と云く其時兩國の兵小我國の軍勢と合せり
 押渡され速小誅伐しつたは百度千回降参と云くと赦しめさる新羅王と
 誅し其後の地と云く分ち其二分と皇國の官家と二分とい百濟國賜り
 聖明王の時の忠誠小報ひめし一分の高麗國賜りて恩賞と給は永く悪心を
 生じら直進ふ事然らば後小百濟高麗兩國の王も自ら朝参す下時小一年

宛交々小朝参せり。如此の如く三韓の人の皇國の人とらひ色と重んじ愛を
 厚くせり。故に此國の婦人ともて妾とせんと請ふ。其時の願ふ任を聽
 り。自然皇國をて子と生じ。其の交代を歸るとは妻子とて歸らる。是
 り。又兩國王太子とて。皇國をて生ぜり。者と
 世嗣とて。勅し。永く皇朝の奴とす。自ら國家の藩鎮とす。是
 兵と用ひ。太平久の道理と。富國長延の計策と。奏し。天皇歡感斜
 り。多し。禄と賜り。日本止ら。則ち畔の親市の館に還せり。且又百濟より送
 まり。恩率参官。其餘の官人をも各物賜ふ。是は本國に還ら。勅し。蒙り
 官人等も。小帝都と辭し。難波の館に退き。日と定り。舟船せん。然るに此時。思
 率参官竊ふ。德爾余奴等。小叫さる。吾後兩人此地に來り。後日羅と徴
 容子と伺ふ。心く新羅と誅伐し。任那と兵と。計畧と求め。人々
 由新羅に我國先王の讐敵なり。あつ。日本力と合せ。俱に恨を報じ。

とも。畢竟渠が計畧。因り。三國の勢と挫し。独日本の威風と強し。
 終ふに我國の大王も。千里の波濤と。此土に朝参し。奴僕の如く。驅役
 必定り。退き。事の意と顧み。日羅と其伶不捨置と。決り。後の患
 かり。卿等。いふ。此を止す。國の爲一命と。抛ち。日羅と刺殺し。後。我
 輩。其間筑紫の地。止り。卿等の安否と。窺ひ。相待り。事。筑紫
 まで。逃來り。同一本國に歸ら。又我を諸。此謀略と。成さん。と
 おり。平常日羅と親し。一萬渠が。爲疑り。却て。仕損を。せ
 非ぞ。各の心底。思ひ。歎息。尋り。德爾余奴等。辭
 せ。我心あり。國家の爲。露命と。捨ん。何ぞ。足ん。足下。後
 小日と。貴し。我と。待り。速に本國に歸り。面々。兩個。幸に日羅と。昵
 ら。成就掌の中。あり。猶計略と。示し。合せ。恩率参官。別離。再び。未
 市の館。歸り。斯く。德示余奴の。兩人。大和。歸り。日羅が。前。出戀。涙

を流し我々兩人帝都と辭し難波より発船せんと仕りしを一ふ此國の天皇の
 徳と慕ひ二ふの數月船中ふ於て先生の教と蒙り夏ともと思ひ敢て捨るふ忍び
 こと立歸り侍りぬ願ひの先生序より朝延奏し我輩永く朝廷の臣や
 ちして止らり其恩廣大とんと實しやうふ敷くみど流石に博物の君子と
 して人心乃奸計と察しとつるを悦んで兩人ととも我軍に朝廷に奏し
 人々と薦め奉へしと終に館中ふとらりしを薄情けれ是より昼夜ととも
 ほし一宣し時と得り刺殺さんと計しとて元来日羅は才機孫呉に彷彿するもの
 ありび勇力人ふ勝るれば容易の事計しとて左や右猶豫を内昨日と過
 今日とて徒に同年十二月ふたりふり此に日羅は常小海濱の眺望と愛
 難波の大郡の風景の地ふ止りたこと奏しれば天皇深望を任せ難波の館の
 側小住を旨勅しむ。同月難波ふ移りて徳爾余奴と俱に難波ふとてひ
 未だ夜毎ふ日羅と附移り衣服の裏に短劍とかくし持て深更ふふよるを

待く己が所と忍び出霞所より伺ひり。殺害せんと計ひり。然るふ日
 羅の熟睡より後身の内より光出現し寢室燈火と列た如く流石に大膽
 不敵の徳爾余奴も是に恐れと迫げし能く誠古今未曾有の人物
 たり。されども兩人氣と所す一尺寸の間と怠り余念と忘れ伺ひり。十二
 月晦日の夜例の如く更々と待て日羅が寢所へ移り寄戸の隙間より闇を見
 る小天運の縮る時節なり。今夜ふより身の光も現し。借はしと熟睡せらる
 や否や猶と外に身をたりし耳とをぞと能く日羅が鼻雷車と引をじ
 兩人と衣裏の短劍と抜き今夜皇天百濟の運と守りり。又我々の
 誠忠と恵より時より。此時と去いし何時と本意と遂げし寢所に潜ひ入
 徳爾余奴と下して日羅の胸のより一突ふ突貫く。も三韓無双の豪傑と
 刺客の手と免る夏く声も立て死してをぞと最惜し。此事さうふ知
 者うく竊ふ己が房より短劍と隠し知らぬ顔して居たり。夜明て後日羅が

後臣寢所入て見るく大周章。四方の人と喚聚り衆人工と下さく。皆々群とまつく骸と見るく氣息と絶え身軀石鐵なりも冷る。諸人口々言るく是他所より忍入て害したる非を恐る。邸中より日羅恨有る所為とんとて近臣の云く。否さふいあし。今此所の館に隣り。彼館中より新羅國の人返りて多くあり疑はる。是が所為とんと其詞亦終らざり。日羅忽然と薙を金く新羅の所為とて我部下ある徳爾余奴が予子死せり。我又恩率三官と殺すとて言早りて息絶たり。近臣亦急小徳爾余奴と搜ると早此所と落失せり。先早馬と以て帝都に急と告り。天皇日羅横死と憐れ。四方早使と遣り徳爾余奴と求る。所既り。兩人の播磨國鹿子の湊より逃去たと擄めて朝廷に奉る。有司の人々徳爾余奴と拷問あり。日羅と殺せり。更と悉く白狀及び。頃て兩人と獄屋に入。日羅一族肥後國葦北の國造小賜と彼が為仇と報る。由勅り。眷属悦ぶと

限らる。姫嶋の地に於て徳爾余奴と殺り。日羅が恨とて此の恩率参官の筑紫の地より。兩人の安否を伺ふ。既小擄せりと聞船と出て道歸らんと。對馬の海上と過ると俄に波浪天に漲り。満天漆と流が如く。須臾の間四方闇夜とあり。潮煙たつ。船の辺尺寸の間を見分が。船中大狼狽と。舵帆と下し。楫と直さんと。また黒雲變變と。雲中小日羅の姿有る如く。船中より驚き水主楫取り至。迄魂魄身小添を恰純と解る。糸繩の如く。風弥烈く。船忽ち巖の上に乗ら。微塵小碎けて恩率参官が海底に溺れらる。たゞく端船のつて地方に遁る者。後此を語り。是と聞人毎。日羅が怨靈の嚴重と。感歎有り。斯有る程に。厩戸の皇子。日羅の死を恤む。いひ骸と攝洲小郡西野丘の前。葬りたまふ。誠小皇子の神に通じ。今年僅十二歳とて。日羅對面より。時早くも。此難導た。死を知り。召さる。更凡夫の論と。所あり。感と。尊と。

勝海が奏と容るるべ此に押坂彦人皇太子と奉る豊國法師と入る道
 徳殊勝の出家と請一玉體ふ込つけ祈るる守屋勝海の両臣へ心の中ふ甚
 憤る豊國法師と白眼つけ満面ふ怒の色とある座と蹴立て立くりぬ
 是より守屋用明の御弟皇子穴徳部の皇子と以て天下の主と奉ん
 と討らる此穴徳部皇子と申奉る御母の蕪我稻目の女小姉君とて用明帝乃
 御母堅塩媛の御妹あり姉妹とも小敏明天皇の妃とあり御寵愛淺く御姉堅塩媛は七男
 六女と生かす御妹小姉君は四男一女と産る則用明天皇と穴徳部皇
 子との異胞の御凡方なり又穴徳部皇子の妃の父君小宅部皇子と申す守屋とひりべ一談
 にも及ぶ同意なきは此皇子の先々九代宣化天皇の季の皇子なり
 穴徳部皇子其生質玄曲ふて禮ふ抱るる人の諫と用ひるるの事なり
 色あふる嬌俊究るる既小敏達天皇當今と皇太子と前御の御凡皇子
 の審位小即やるる恨るる當今と退け奉る皇位と奪んと計りて
 凡行狀善るる不義の事ども多くあり一毎るる薄情なり

抑佛法本朝ふ渡る始へ人王卅代敏明天皇大和國磯城嶋 即位十三年壬申の
 金刺の宮在年冬十月ありて百濟國聖明王の方より西部姫氏達率怒喇斯致契西國
 其司と怒姫氏の姓達率の官名と使者と使して始り釋迦佛の紫銅の像一
 怒喇斯致の名契に其尊と御字と御字とと論書數百千卷と持て朝廷ふ敵と別ふ
 軀と幡蓋とびふ佛經同く論書數百千卷と持て朝廷ふ敵と別ふ
 表と奉る其文云是法於諸法中最為殊勝難解難入雖周公孔子尚
 不能知此法能生無量無邊之福德果報祈願依怙無所乏缺且夫
 遠自天竺爰洎三韓依教奉持無不尊敬由是謹奉傳帝國云
 天皇原來万民と惠たまふ又諸法と尊るる故ふ慮慮歡喜料るる
 然れども自ら善惡と決るる事と群臣ふ歴問のる是と天下ふ弘べし
 とて悉く朝廷ふ之と納るる是佛法皇國ふ入の権運る。斯く天皇一日
 群臣と召し今度百濟國より佛教と送朕彼佛像と見るふ甚端嚴也
 らんと拜するや否や此は一統と一言と答ふるふ蕪我大臣稻目す



百濟國ひやくさいこくの書しよと獻けんど
 佛像ぶつざうおよひ經論きやうろん

百濟ひやくさいハ和名わな久羅くわと云いふ其國そのくにおよそ五十
 余國よこくに其大國そのおほくにハ一万余
 家いえ小國せうくに數千かずせん家
 總計そうけい十万余戶じゆばんに
 と云いふ新羅しんら高麗こうらい
 百濟ひやくさいハ一統いつとうと号ごうす
 今ハ朝鮮しんせんと号ごうす



出て漢土の諸國より珠玉周公且孔子を續て世に出人心も諸國に勝れて
 聴く容易他國の法と信じて國ありて今聞漢土佛法を信じてかや
 其外西蕃の諸國何と礼と奉りて拜する由、されハ大日本の獨拜一
 ざるの理やんや陛下宜しくこれと拜し之と奏ん此時物部大連尾輿中臣
 連鐮子齋しく進み出て奏りて、我國ハ天照皇太神の御苗裔日嗣
 の帝位に在り時ハ唯諸の神祇と拜し百八十の神と以て春夏秋冬の神事
 忌むるを以て國家の先例なり佛の法を蕃國の神なり是と拜し
 之を恐るるハ皇國の諸神祇怒りてあはひ。やう凶變あんと異なり。
 決して拜し之をなれと言と而し諫奏とあれとも稻目宿禰等と
 只管拜し之と薦り奉りて止ば天皇も之を慮とせしむ仰せ
 されハ大臣八拜せよと云大連ハ拜せしむれ何と國家の爲なりと
 先群卿の中情願ありて佛と拜せんと思ふ者ありハ朕ハ代りて拜せ。此時

稻目宿禰とて又奏りて臣試み佛と拜し申べと天皇も之を
 大臣の請ふまじりて佛像と預けたまへ稻目ハ大喜ひてこれと受朝廷を
 辞し即ち己ハ小墾田の家と淨めて安置し又別荘の向原の宅と伽藍と
 是と向原寺とて本朝寺院の権輿なり。これより稻目ハ自ら出家の業
 と修りたる然るも其後疫癘大流行し家々毎ハ病卧人民死する者夥しく
 治療と施すとて治むる者稀なり。物部大連中臣連大も驚き扱を先
 小我輩頗小佛法と國家ハ入給ふとせんと。諫奏し奉りて今上より
 聞召入らんと。護我の稻目己ガ家と寺を。斯ハ外國の神と祭るや。ハ
 我國ハ諸神祇崇りてありて覺えり速に奏聞とて此弊と退けど
 有るは。ハ兩卿の朝に出奏し。ハ先ハ臣ハ所と納め。佛法と
 退けらるる故ハ今果して人民の害ハ速に佛像經卷と焼きて
 られ諸神祇と和らむ。後福と祈り。ハ頻りに奏して止せ。ハ

天皇有司勅（ちゆう）の佛像と高市郡飛鳥川の西（にし）難波の堀江（ほりえ）に乘（のり）れ
 忽（たち）ち稻目宿禰の家宅（いかりのしやうぢ）今（いま）少（すく）の伽藍（がらん）取（と）りて火（ひ）と放（はな）つて一時の煙（けむり）も
 焼（や）きまてせめひりる。程（ほど）も佛法（ぶつぽう）と修（しゆ）むる者（もの）内（うち）々（々）心（こころ）と苦（くる）し再（また）佛法（ぶつぽう）の起（た）る
 べしと佛（ぶつ）隨（ずい）ち行（ゆ）き願（ねが）ひる。然（しか）るも國津神（くにづかみ）の荒（あ）らまじも時の勢（いきほ）あり佛法（ぶつぽう）我（われ）
 國（くに）不（ふ）弘（こう）まじり時運（ときうん）到來（とらい）ふ。此（こゝ）一（いつ）の不思議（ふしぎ）あり。翌（あつち）十四年五月河内國（かみのくに）より
 奏（そう）しりる。河内國泉郡茅渚（いわたのいづみ）の海上（うみ）に夜（よ）に梵音（ぼんおん）の響（ひび）あり其色（そのいろ）あざも雷（かみなり）の
 光（ひかり）と見（み）候（まう）ふ。先皇（せんかう）の曜（あ）ふも是（こゝ）に明（あ）らうと登（のぼ）の如（ごと）く小候（こまう）と訶（な）りて
 群臣（ぐんしん）の奇異（きい）の懷（おも）ふ。天皇（てんかう）も是（こゝ）に溝辺（みぞべ）の直（ただ）と召（よ）せ急（いそ）ぎそのよし
 見届（みとど）来（き）まじと勅（ちゆう）と蒙（あ）り直茅沼浦（なほのうら）に小舟（こぶね）を夜（よ）に乘（のり）りて澳（あ）の方（かた）を眺望（たうぼう）
 する。果（は）て海上（うみ）に赫（あ）々（々）とて登（のぼ）の如（ごと）く光彩（くわんさい）の如（ごと）く所（ところ）全（ぜん）雷（かみなり）霆（てい）の
 裏（うら）に小舟（こぶね）を溝辺（みぞべ）の直（ただ）其夜（そのよ）の明（あ）らうと待（まち）ひ船（ふね）とて光（ひかり）のありて鳥（とり）の如（ごと）く
 到（いた）りて小樟（こさう）の古木（こま）忽（たち）ち然（しか）とて海上（うみ）に漂（た）蕩（たう）す。幾許（いくさ）の星霜（せいそう）と累（かさ）なりて

見（み）ゆると海中（うみ）に不（ふ）有（ゆう）く朽（く）と爛（らん）と尋常（じんじょう）の類（たぐひ）いと見（み）えさうに直（ただ）とあり是（こゝ）を取（と）
 天皇（てんかう）小奉（こほう）る。其夜（そのよ）より曾（ま）て海上（うみ）に梵音（ぼんおん）の響（ひび）もまじり。此時（このとき）稻目宿禰（いかりのしやうぢ）と始（はじめ）と
 佛乘（ぶつじやう）不（ふ）心（こころ）を傾（かた）り群臣（ぐんしん）評定（へいぢやう）し。誠（まこと）に殊勝（しゆせう）の靈木（れいぼく）なり。光（ひかり）と放（はな）つて梵音（ぼんおん）の響（ひび）
 と具（た）まらむ。小佛（こぶつ）天（てん）の加護（かご）疑（ぎ）ひふ。何（なに）と佛法（ぶつぽう）と再（また）び弘（こう）めさせたりと歎（なげ）
 訶（な）りて。天皇（てんかう）と原來（げんらい）御心（ごこころ）の中（なか）に。あつて佛徳（ぶつとく）と尊信（そんしん）させたり。其願（そのねがひ）も
 任（まか）せ此樟（こさう）木（き）と以（もつ）て二命（にのみこと）に佛像（ぶつざう）三軀（さんしゆ）と造（つく）りし。且（かつ）是（こゝ）に百濟國（ひやくせいこく）勅（ちゆう）し
 佛經（ぶつぎやう）と講（かう）むる博識（はくしき）の沙門（さもん）と渡（わた）す。有（あ）りて年々（ねんねん）博識（はくしき）の名僧（なまう）と選（え）て
 奉（ほう）りて。斯（ごと）く年往（ねんわう）月去（げつこ）て。天皇（てんかう）の三十年己亡（こゝろなき）。三月（さんげつ）獲我（かくが）大臣（だいじん）稻目（いかり）薨（しやう）び同三
 十二年辛卯（しんまう）と夏四月（げしやう）天皇（てんかう）御違例（ごちがひ）に崩御（はうご）あり。程（ほど）も崩御（はうご）あり。世（よ）に諸卿（しよけい）
 評議（へいぎ）あり。皇太子（かうたいてい）譯語（やくご）田湊（たみなう）中倉（なかつくら）太珠（たいしゆ）敷尊（しゆそん）と以（もつ）て帝位（ていゐ）に即（す）せ奉（ほう）る。人皇（にんかう）
 卅一代敏達（さんじだい）天皇（てんかう）とれり。物部（ものべ）尾蕨（おしわ）の子守屋（こまや）とつて大連（おほのむすひ）と獲我（かくが）稻目（いかり）が子馬（こま）
 子（こ）と以（もつ）て大臣（だいじん）とあり。物部（ものべ）獲我（かくが）兩家（りやうか）朝廷（てんてい）に並（なら）びて。萬機（まんき）の政（せい）を預（あづか）り天下（てんか）

昇平あり。則ち先帝の都大和國磯城嶋金刺の宮あり。譯語田幸玉宮又磐
 余池邊雙槻宮ホ在り。同天皇六年百濟國より佛經禪律佛子寺匠ホと
 獻じ。同八年新羅國より釋迦像と貢る。同十三年秋九月百濟國より鹿深の臣
 と人彌勒菩薩の石像一軀と朝廷に獻じ。靈驗明著と云ふ。と奏し。其
 獲我馬子の父縮目あり。佛法と尊信し。主上石像と馬子宿禰
 あり。馬子大不飲。則ち我館の側小佛殿と經營する石佛と安置し。
 香華給仕する人と選ひ住持せしむ。高麗の僧慧便と云ふ者播磨國小
 一と迎へ。護らし。且梁人司馬達ホが女善信尼と以て。齊會と設く。此
 時司馬達ホが食する。齊の飯の中より忽然として舍利一枚と得る。光赫灼
 として尋常の物あり。頻て馬子不獻じ。馬子慧便見せし。慧便之を
 見て三度禮拜して申す。是佛舍利あり。舍利の功德と詳ふ。語ふ。馬
 子の信心肝微し。舍利と金函におさる。朝廷に奉る。慧便が語りし舍利の功德

と奏し。天皇行の群卿おの奇異の思ひ。彼舍利と朝廷に止らる。定り。然るに物部の守屋の始り。佛法を朝ふ。海内を弘く。憤り。蕪我の馬子に佛徳と尊し。且小心不快。其上和漢も小兩雄同。朝廷に並び。介は守屋大連。其為人豪驕。人に見る。事荃芥の如く如何。馬子宿禰の非と見。其職を遂退。思ひ。馬子も其心女悪く。且聡明。一族蕃茂。官職の守屋の下。有る。威勢の守屋が。故に双方に便。其威と傾んと。害心と。程に今佛舍利と朝廷に止らる。大連中臣勝海。進出て。數語と。諫奏。終に馬子宿禰と義論及び。其善惡と試ん。為舍利と以て鐵質と。有。司に仰せ。鐵槌と以て之と打。然るに鐵槌質に陥じ。舍利更に壞す。又水に投じ。沈ま。天皇甚に怪。宮中を止らる。又水に投じ。沈ま。天皇甚に怪。宮中を止らる。又水に投じ。沈ま。天皇甚に怪。宮中を止らる。

三國七高僧傳圖繪卷六

三十一

守屋勝海ホ心成と願きまめい舍利と馬子の宿祢小還賜り朝廷と
 退けられ馬子の舍利の奇瑞と尊之。弥佛乘小歸依。高市郡大野の北
 小塔と建立し舍利と塔の柱心小安置。天皇の十四年二月十五日塔成就。大會と
 催し勸ぎを限ず。然る小此時天下大疫癘行。人家も小悉く病ふ。民
 死するも數も多し。物部守屋大連。中臣勝海小参内して奏し。先帝臣
 等が諫奏を用い。みまほ。宿目父子が奏し奉る旨と信。異國の邪法と容さ
 ず。尚當聖代。い。是と捨さめ。故小疫癘民間小流行。庶
 民十小八九死。國中の人種小既小絶するも。ゆ。小菴我の大臣の佛法
 と興。行。其。上石川の宅の東小寺と草創。多々の僧と集り
 三個の尼僧と此処小住持せり。僧尼一。緒小有て。根。小。女。淫。ら。り。
 うけ。速小僧徒と追拂ひ。三個の尼と。之。佛殿と焼捨られ。神明納
 受あり。疫癘止と疑。之。奏。と。折。馬子の宿祢朝廷小無じ

守屋勝海小阿。王。諛。徒。人。の。言。あ。つ。異。口。同。音。小。此。と。奏。り。れ。ば。
 天皇守屋が奏さす。寺館と破却と。詔下。程。今日守屋時
 刺と移。諸有司。軍吏の徒と引卒。先石川の宅の東。彌勒の佛
 殿。寄。其。身。寺。中。小。胡。床。と。ま。其。上。小。跏。坐。軍。吏。小。指。揮。て
 炬火と振。佛殿佛像と。焼。惜。び。美。麗。と。ほ。せ。
 高樓大廈。忽。一。圓。の。火。と。變。猛。火。東。西。小。充。滿。て。乱。火。の。下。より。近
 出る僧尼。烟。あ。ひ。せ。い。手。足。と。焦。漸。進。出。る。軍。卒。三。尼。と。擲。夫。り
 即。小。大。野。の。丘。あ。り。谷。と。揚。佛。塔。と。斫。倒。火。を。放。る。斯。て
 三。尼。海。石。榴。市。の。亭。に。穿。と。造。り。て。入。置。佛。像。經。卷。燒。殘。る。物。と。ば
 悉く難波掘江に捨。換。我。の。馬。子。の。愁。傷。了。遂。小。病。と。発。と
 至上病と問。小。馬。子。歎。奏。て。曰。く。臣。が。病。頗。る。重。三。室。の。ら。つ。小
 め。平。愈。あ。り。も。帝。と。憐。あ。る。汝。等。佛。法。と。行。と。

らんと許され猶三尼の行狀正しく明白なりし程小馬子小還しわらる。
 馬子ハ再び換生の意地一稍て又造功を起し義麗の佛刹を徑營ける
 時小今年天皇御異例小渡らせり以終小秋八月崩御仰しく用明天皇
 宝位小即ちさしり小即位ニ于丁未の歲小坐して御不豫小すこせり小
 より群臣小のなまじく朕佛法小帰して三宝を祈んと欲すと此時守屋及
 中臣勝海等曰何ぞ國津神を背きて外國の神と敬んや馬子曰唯詔小
 任へそ豊國法師と宮中小入祈禱せしむ是より稱馬子守屋遺恨を
 含み終小大乱小おふ用明天皇ハ僅小在位二年小して山崩御在りり
 諸も物部方割守屋大連中臣勝海ハ天白皇の佛法帰依と憤り豊國法師が
 参内の時より暫朝参り忌居たりしが諸卿疑とせんと慮り人列參内
 群臣とぞ列座せり實や隱りり頭よりりを既小守屋大連中臣
 勝海此程より穴穂部皇子と以て天下の主と奉らん計議り群卿の

六

耳小漏きとえりりあど人々所小頭とさ合せ斯て此また打捨とさる世矢乱
 乃端とるる辰守屋が今日朝廷と退く処と路次小おひて討取りと豫計議
 と決守屋の飯と路頭に伏兵と置んと喧さる丹守屋小一味同意の人多小ハ
 押坂部史毛屎八坂大市連小坂漆部連等より晝夜頭と交へ好討とこし
 何よりて刺客と用ひ竊小皇太子押坂部史人と刺殺し奉んとする時小押坂部
 毛屎ハ群卿知りり守屋と討取ると計る催しと探り聞りり守屋が耳元
 小奇云々の企を以て公と討取んと計る由兼と傳ふ未だ路次とけり
 塞がざり己前小疾府中に退き兵と催し豫り防禦の用意をりり之
 其も追付参りりと云ふ守屋とて密計漏りりと覺也ちち暫時も猶豫
 志ざり勝海小叫りり兩人一同小朝廷と下り河内國淡川郡阿斗の別業
 小引退き俄小人数と催りり元末守屋が重恩小浴りり徒府中小丸満
 其上所領の地廣大小家人許多持りり朝廷諸衛の兵と恐るる足り

と待たけり。中臣の勝海も已が家不権籠り時不臨んで守屋と後楯と一戦
 及ぶんと同じく勢とど催しける。帝不御不豫不渡りせり。此と自然散聞不達し
 るに御腦のく不御心と痛くせり。有司の人々宮人と取らり。敢て駭動の
 一と奏し奉らば。有司諸官おのく朝廷と辞し。もろくの兵衛武將甲冑は
 鎧ひ矛矢と校。大凡の皇太子の宮中不馳聚り。馬子守屋の不和より起り。
 私不打果せん為と申も有守屋勝海の西人皇太子と立替ん為の及逆より
 とも云ひ途巷の浮説區々つて。都の騷動あり。昂の沸ぐと。獲我馬子
 不隨心の徒に獲我の館不寄集り。甚嚴不捕り。古今未曾有の大變あり。此
 時中臣の勝海家不墓々。勢も来らば。事成り。覺束さると察し。皇太子
 の宮中不参りて降参り。稍て罪科と宥らる。然れども是全く本心不
 めらる。事と察し。皇太子の御内不舎人迹見の赤檣とら者。勝海を還と追け
 唯一太刀不伐殺せり。守屋ハ勝海が討り。由て傳へき。斯ての大望成り。と思慮

とらぎし馬子宿称と詐て和儀とむと馬子詐るると知るとも。是と兼伏
 して即日和睦調へ。此ふ於て都の内漸く静り。諸軍甲冑と解て諸方(離散
 一。穴穂部の皇子。守屋の大連と共不参内あり。上下安堵の思いとさし
 たり。然るに天皇御惱日々重らる。同月九日崩御ま。是より群臣日と
 選ひ太子と帝位不即奉らん。時皇太子次で御異例あり。せらひ。同
 五月不薨。いぬ。百官有司安さ心。經體の君と定め奉るまで先敏達
 天皇の皇后あり。豊御食炊屋姫尊と以て主上とす。皇后とて天下
 の大政を聞き。名とらる。四月より六月まで皇位空。定らば諸御詮義多岐不
 ころんて更不決。時穴穂部の皇子の守屋とあり。合せ馬子と亡
 炊屋姫の尊と押ら。帝位およんと大概手配と定めり。此と馬子の宿称乃
 方へ漏聞えられ。馬子直不参内。皇子守屋が計畧と一々炊屋姫不奏し。其
 夜諸卿の兵五百余人と遣し。皇子とら。御内一族悉く追伐し。卒ぬ

守屋官軍と
敗る謀略を
指揮す

守屋軍慮とありし
六百人の銳卒を引
率一官軍のいさ
半途不埋伏して不音
子起つて奇撃と
大に敗る皇太子
も三つあやうくと
あつて官軍數同
敗北せし



守屋大臣



三國七高作傳國經卷六

七

守屋の大連(守屋)穴穂部の皇子の亡(シ)由(ユ)と聞(ク)ま(ス)る(ト)大(オ)事(シ)露(ル)頭(ト)す(ル)今(イ)ハ(シ)罪(ツ)名(ナ)道(ミチ)々(ト)道(ミチ)々(ト)死(シ)ん(ト)阿(ア)斗(ト)の別業(ト)と(シ)ら(シ)家(イ)々(ト)火(ヒ)と放(ト)ら(シ)一(ヒ)燼(シ)不(ト)燒(ヤ)と(シ)子(シ)弟(ト)等(ト)數(ス)千(ニ)人(ト)引(ヒ)卒(ス)河(カ)内(チ)國(クニ)淡(タ)川(カハ)の別業(ト)不(ト)立(ト)越(ト)四(シ)面(ヘ)不(ト)城(シ)戸(カ)櫓(ヲ)と(シ)擡(ト)上(ル)敷(シ)地(ノ)内(チ)不(ト)高(ト)さ(ス)數(ス)十(ニ)丈(ノ)椶(ト)の(ト)大(ト)樹(ト)有(リ)一(ヒ)木(ト)と(シ)て(ト)敷(シ)地(ノ)と(シ)覆(ト)う(ト)其(ノ)枝(ト)と(シ)小(ト)楯(ト)と(シ)高(ト)く(ト)櫓(ト)と(シ)造(ル)要(シ)害(ト)堅(ト)固(ト)不(ト)楯(ト)籠(ト)と(シ)諸(ト)方(ノ)逆(ト)賊(ト)と(シ)招(ト)き(ト)募(ト)り(ト)穴(シ)賊(ト)も(ト)追(ト)々(ト)馳(ト)加(ト)り(ト)押(ト)坂(ト)部(ノ)史(シ)毛(ト)屎(ト)八(ト)坂(ト)大(ト)市(ト)連(ト)小(ト)坂(ト)漆(ト)部(ト)連(ト)と(シ)始(ト)り(ト)從(ト)類(ト)眷(ト)屬(ト)あ(ト)り(ト)國(ト)々(ノ)無(ト)賴(ト)凡(ト)三(ト)萬(ト)餘(ト)人(ト)野(ト)あ(ト)ら(シ)山(ト)あ(ト)れ(ト)夫(ト)と(シ)た(ト)楯(ト)と(シ)造(ル)合(ト)戰(ト)の(ト)用(ト)意(ト)專(ト)ら(シ)り(ト)蕪(ト)我(ト)大(ト)臣(ト)の(ト)そ(ト)炊(ト)屋(ト)姫(ト)の(ト)皇(ト)后(ト)不(ト)奏(ト)り(ト)多(ト)う(ト)り(ト)皇(ト)后(ト)諸(ト)國(ノ)官(ト)軍(ト)と(シ)り(ト)れ(ト)守(ト)屋(ト)誅(ト)伐(ト)の(ト)軍(ト)議(ト)と(シ)遂(ト)ら(シ)る(ト)と(シ)諸(ト)皇(ト)子(ト)諸(ト)卿(ト)と(シ)召(ト)集(ト)り(ト)り(ト)此(ト)時(ト)厩(ト)戸(ト)皇(ト)子(ト)十(ト)六(ト)歳(ト)不(ト)ら(シ)せ(ト)り(ト)諸(ト)皇(ト)子(ト)と(シ)共(ト)軍(ト)義(ト)あ(ト)り(ト)言(ト)詰(ト)利(ト)非(ト)明(ト)白(ト)不(ト)し(ト)道(ト)理(ト)不(ト)的(ト)と(シ)以(ト)て(ト)一(ト)決(ト)し(ト)同(ト)七(ト)月(ト)朔(ト)日(ト)官(ト)軍(ト)淡(ト)川(ト)を(ト)向(ト)り(ト)皇(ト)族(ト)不(ト)泊(ト)瀨(ト)部(ト)の(ト)皇(ト)子(ト)欽(ト)明(ト)帝(ト)の(ト)子(ト)竹(ト)田(ト)皇(ト)子(ト)

難波皇子春日皇子敏達帝の厩戸の皇子群臣の獲我馬子の大臣紀臣督宿祢臣勢巨比羅夫膳臣賀拖夫葛木臣烏那羅と始(ト)り(ト)諸(ト)衛(ト)禁(ト)軍(ト)國(ト)々(ノ)軍(ト)勢(ト)都(ト)合(ト)一(ト)萬(ト)余(ト)人(ト)り(ト)就(ト)中(ト)泊(ト)瀨(ト)部(ト)皇(ト)子(ト)ハ(ト)年(ト)齡(ト)長(ト)き(ト)せ(ト)り(ト)諸(ト)軍(ト)の(ト)指(ト)揮(ト)と(シ)司(ト)す(ト)ま(シ)ひ(ト)真(ト)先(ト)備(ト)大(ト)和(ト)國(ト)池(ト)邊(ト)雙(ト)槻(ト)宮(ト)と(シ)發(ト)向(ト)り(ト)同(ト)日(ト)河(ト)内(ト)國(ト)淡(ト)川(ト)の(ト)城(ト)に(ト)寄(ト)ら(シ)れ(ト)る(ト)此(ト)と(シ)守(ト)屋(ト)の(ト)大(ト)連(ト)へ(ト)賊(ト)群(ト)と(シ)あ(ト)り(ト)堅(ト)固(ト)不(ト)城(ト)と(シ)終(ト)て(ト)官(ト)軍(ト)既(ト)不(ト)押(ト)し(ト)り(ト)と(シ)聞(ク)ら(シ)り(ト)路(ト)次(ト)の(ト)半(ト)途(ト)不(ト)伏(ト)勢(ト)と(シ)置(ト)く(ト)押(ト)し(ト)せ(ト)來(ト)る(ト)諸(ト)軍(ト)の(ト)半(ト)を(ト)不(ト)意(ト)不(ト)起(ト)つ(ト)討(ト)て(ト)る(ト)程(ト)小(ト)官(ト)軍(ト)の(ト)あ(ト)り(ト)し(ト)る(ト)隊(ト)伍(ト)を(ト)色(ト)々(ト)に(ト)散(ト)ら(シ)不(ト)敗(ト)北(ト)と(シ)厩(ト)戸(ト)の(ト)皇(ト)子(ト)も(ト)大(ト)勇(ト)戰(ト)り(ト)守(ト)屋(ト)が(ト)大(ト)軍(ト)不(ト)敵(ト)し(ト)終(ト)り(ト)老(ト)の(ト)原(ト)と(シ)り(ト)所(ト)ま(シ)て(ト)敗(ト)走(ト)し(ト)此(ト)不(ト)屯(ト)一(ト)夜(ト)と(シ)あ(ト)り(ト)再(ト)戰(ト)と(シ)ら(シ)ん(ト)と(シ)議(ト)せ(ト)れ(ト)翌(ト)七(ト)月(ト)二(ト)日(ト)敗(ト)軍(ト)と(シ)集(ト)り(ト)て(ト)淡(ト)川(ト)不(ト)押(ト)し(ト)せ(ト)數(ト)回(ト)攻(ト)戰(ト)と(シ)り(ト)悉(ト)く(ト)敗(ト)し(ト)一(ト)度(ト)を(ト)勝(ト)利(ト)と(シ)得(ト)り(ト)し(ト)厩(ト)戸(ト)の(ト)皇(ト)子(ト)軍(ト)慮(ト)と(シ)ら(シ)ら(シ)奏(ト)河(ト)勝(ト)迹(ト)見(ト)赤(ト)檣(ト)と(シ)始(ト)り(ト)僅(ト)二(ト)百(ト)余(ト)人(ト)の(ト)勢(ト)と(シ)引(ト)卒(ト)し(ト)所(ト)詮(ト)人(ト)力(ト)の(ト)戰(ト)と(シ)勝利(ト)有(ト)り(ト)覺(ト)え(ト)偏(ト)小(ト)佛(ト)天(ト)の(ト)擁(ト)護(ト)と(シ)り(ト)戦(ト)ふ(ト)如(ト)く(ト)折(ト)し(ト)も(ト)御(ト)陣(ト)の(ト)側(ト)不(ト)

白膠の木有りと伐採り。自ら四天王の像を作り頂髪の中不結び入。又諸軍も四天王の像と画さる。縮て甲冑不結つけせ。曾て諸王子達も告知せらる。夜の更と待て陣中と忍ひて同日曉黎。法川の城不押せ。此猶豫とあり。同音不関の声とあひらる。賊軍へ兩日の戦ひ不勝利と得て。官軍恐る不足らば。心橋りて息とせ。何の思慮もく財と處不朝雲深き其下と。旌旗空不翻り。先々と攻附たり。俄の寄手不城中おどろき。周章大とる。尤其勢僅二百余人。不中。城中の勢もろぐれ。九牛と毛と。官軍不の神明佛座の擁護や加。以の外の大軍と見り。城のほうと寄附と。面と物の具とも著は。大禪。成て櫓不のちり散々不矢と放ら。多くのあ。矢と射捨ら。矢種大半射尽し。跡不残。官軍の陣不の厩。皇子僅の勢。法川へ向とせ。ひ。曉不間。諸皇子始。馬子と。以の外驚嘆。何ら以て滴。皇子の御身危。と。我先不出陣。思く。不駟。馬。天と。東西五六里。間。墓土。虚空。不

かびと夥し。かど云。斗。守屋が城中。是と見て。今日都。後詰の大軍向ひ。允十四五万騎も押寄たり。不の戦。先不義精。唯。斗。此時守屋が憑と切。押坂部。毛。八坂。大市。連。小坂。漆部。の連。忽ち。西の門と。突。出。せ。賊群。何と。騒。ぎ。我。一。不。出。出。制。見。え。り。是。朝。廷。宵。々。天。誅。且。四。天。王。擁。護。守。屋。ハ。榎。の。高。櫓。不。上。大。音。上。げ。て。味。方。と。勵。下。知。不。厩。皇。子。先。陣。不。進。諸。天。大。神。祇。と。す。り。得。り。四。天。王。神。の。為。不。寺。塔。と。造。心。念。不。祈。誓。ひ。迹。見。赤。檮。不。下。知。赤。檮。不。下。知。天。神。地。祇。と。念。能。引。て。兵。と。其。矢。遙。不。遠。長。鳴。羽。響。大。連。が。胸。と。射。矢。屍。あ。ら。骨。の。方。抜。出。何。以。て。堪。直。逆。不。薩。死。祭。河。勝。是。と。見。て。門。と。破。り。城。中。不。入。所。多。不。火。賊。軍。守。屋。討。れ。不。肝。と。消。我。一。不。出。出。踏。者。數。と。城。中。ハ。全。く。火。河。勝。ハ。乱。火。乃

中より守屋が首と取り城外不出。既而皇子小奉る。此時後陣漸小駈つけ出
 者と生じ。討つるを懸し。あれも泊瀬部の皇子いとれと制し。降る者とみりふ
 殺し給ふ。終小城全く落ふ。備小厩戸皇子一人の功小して衆人賞せむと
 して。儲朝廷小軍忠と抽てたるのみ。恩賞と行ふ。赤檮と迹見の首小
 られ一萬項の田地と賜ぬ。厩戸の皇子養して摂津國小四天王寺と造す。りん
 守屋が追福の。大和國飛鳥村小法興寺と造す。又守屋が領する処の地都て
 十八万六千八百九十項。項ハ今の法六町六段。二百四十歩。あつたり。あり其地河内國小
 蛇草。足代。御立。葦原。津國。あつて。於世。横江。嶋田。熊凝。あつたり。是ホの地とハ厩戸皇子
 奏聞して。悉く四天王寺と銘して所々の寺々寄附せむといふ。又御一代の中
 建立し。りん寺ハ法隆寺。元真寺。中宮寺。妙安寺。葛城寺。其餘も。て四十六
 箇寺。實小國々の寺院多く。いふの皇子より發せり。とらり
 ころ程小天下既小昇平小飯とらると。とらると。赤天子の御位定らる。とらる。群臣詮

議あり。泊瀬部皇子とらると。皇位小定め奉る。此ハ欽明帝第十二の皇子小
 して。蘇我馬子宿禰の妹小姉君の生り。所らる。帝位と勧め奉る。とら。牧屋姫
 皇后の御計とも。則三十三代崇峻天皇是ら。在位五年の間。大が徳なり。所小
 いらる。故。有。え。大臣馬子と御中快。次。常小打亡。は。さ。慮。す。ゆ。は。と。ら。も
 此人執政の大臣といひ。殊小天皇の御ら。外舅といひ。其工守屋勝海等亡び
 て。後天下の政勢大ら。小。馬子一人小飯して。所領田園尤多く。又牧屋姫
 皇后ハ敏達天皇崩御の後ら。天下の大政と聞。召。皇后も馬子の為。ハ。御
 姫君。あ。渡。ら。深。く。馬子と尊敬。い。威勢頗る強大。馬子も
 元来天皇の恒小己と忌嫌。い。と。知。折。言。者。あ。て。馬子と
 怒。り。終小逆意と企て。東漢直駒と。天皇と弑。奉。ら。れ
 とも百官有司馬子が権威小恐れ。此罪と責者。五人も。り。此時厩戸皇子
 廿一歳。斯て後群臣評義して。厩戸皇子と。以て天皇の位。と。奉。ら。んと。も。曾て

天位と知^らくは是^れ中^にて炊屋姫皇后と以^て皇統と嗣^を奉^りて世四代の帝王
 と奉^り推古天皇と此^の時^に厩^に皇子と推古天皇の皇太子とす^るゆふ
 皇子固^く辞^しらる^ると嘗^て勅^を詔^すひ^て及^び終^つ皇子太子と成^りて天下乃
 万機と撰^り改^める^る本朝女帝の^は又^も撰^り改^めの始^り是^{なり}此^の世^に聖徳太子
 と稱^しらる^る程^に太子天下の御政と独^り御^する^に四海の民と^も之^を
 内^に神祇と尊^む佛徳と讃^め嘆^みる^る風雨も順^にて天下昇平^{なり}と
 昔^に勝^り同三年五月高麗國の沙門惠慈來朝と頗^るる^る学業優深^{なり}
 之^を太子師と^{して}佛敎と学^びび^て同五年百濟國の王子阿佐來朝と太子
 不^謂く^も偈^を説^きて曰^く敬禮大悲觀音菩薩妙敎流通東方日國四十九歳傳燈
 演説大慈大悲敬禮菩薩と^こ此^の太子の眉間より白光を放^つ阿佐再拜
 して退出^り同六年戊午三月膳大娘と^以て外妃と^しる太子御歳廿七歳是^{より}
 前推古帝未敏達天皇の皇后^にて^し時皇女貝嬬姫と^以て太子の正妃と

定^りの^は是^れ中^に膳大娘と^は外妃と^稱せ^り同年夏四月太子諸國小名馬と^決り
 け^り甲斐國より一匹の名馬と^獻せ^り一身墨^{なり}も黒^く四脚も白^く驪駒八神
 馬^{なり}と^し舎人調子磨と^しの^を養^ひせ^り同年秋九月小至^り太子これ^を打乗
 舎人調子磨と^具せ^り本宮と^出せ^り東國小赴人と^東向^ひけ^り馬^に忽^ち
 空^に騰^り雲と^踏んで須臾の^ち富^の嶽^にの^り夫^も信濃と^經て越^の白山^に
 登^り山岳峻岔と^遙の下^に見^える^る四の蹄土と^踏ど^り終^つ至^るまで^に恍惚^{なり}
 して空中と^行が如^く之^を依^りて東國北國の地理男女農業紡績の形勢と^見か^ひ。万民
 稼穡の苦^とと察^し又諸國の峻易或^は調貢の遠近と^知る^る三日^にて還^らせ^り
 群臣^の程^に太子宮中^に坐^する^に安^き心^を天皇も^歡慮^をな^する^に渡^せる^に
 所^に還^御ま^りん^ば人々^に歡喜斜^に太子^に有^る事^をと詳^しく^も語^らせ^り群臣
 舌^を卷^て恐^れる^る太子^に神^を通^する^に驚^きる^る尚^此の^も彼馬^のの^りて出^させ^り
 け^り七日^に還^らせ^り數^回有^る其^の名^を彼馬^と云^ふと^して空中^に登^り

調子磨磨と取て同く雲中ふ駭に給るるや。介後太子奏聞とて都の四方
四院と建立しなす。四院といふ敬田院。施藥院。療病院。非田院あり。

敬田院 出家不限る俗人あり。戒律となり。修行せんと思入。施藥院 一切の藥草とて患る人
各病を得て藥と用んとせん。心工貧しくして用る。療病院 一切の男女親るる病者や寄
師長とて者ふ命じて藥とあり。悲田院 老を子く幼ふして父母とて其の養育せしむ
父母の子と憐むるにあり。四箇院の雜支の役とほらるるは誠なるの行ひ。文王の聖徳も勝るる末代王者の方
民と撫育しなす。龜鑑るる。

同九年辛酉年。太子御歳三十ふる。大和國班鳩小宮と宮。此ふ後らせなふ
是と班鳩宮と申。儲此時まで吾朝の曆の法も唯草木の花も。葉の落ると
見て以て農業と起し。皇太子陽胡史王陳とる者と携び。百濟國へはるる。曆
と作る術と習はる。王陳百濟國ふ止ると二年。沙門勸勒とるものと師と
学び大略と得ると之と未其深淵及らる。勸勒と伴ひ辰朝と太子
献るるの曆書天文地理の書あり。道甲方術の書と一覽あり。勸勒と解り

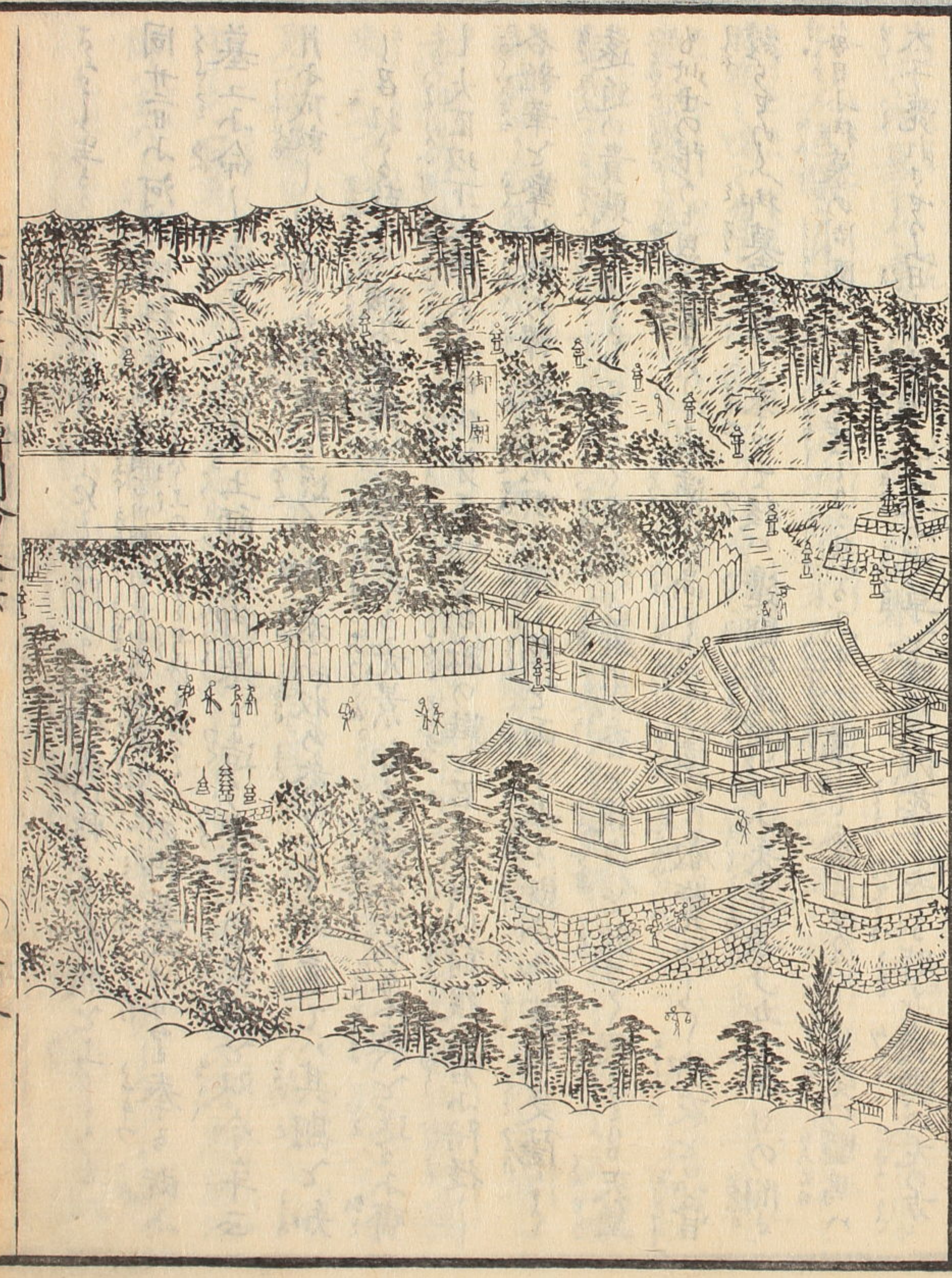
れ処多うしと。太子速ふ解りかやと恰も通達し人の如く却て勸勒の如く
夏遙るる。勸勒大ふ驚き舌を巻て敬禮せり。是る曆法吾朝ふ用はる。如と
して備ふ太子の御功なり。同十一年癸亥十月天皇小墾田の地（都と近き）を
是と小墾田の宮大和國高市郡と申と此時三十二歳なり。儲又秦の河勝小命とて兵法
と講ぜり。又河勝軍法十二道と編り奉る。同年十二月太子秦聞し十二の冠階
と定めり。十二階とて。大徳。小徳。大仁。小仁。大禮。小禮。大信。小信。大義。小義。大智。小智。之
是我國ふ於て位階と定めり。始り同十二年國家の法十七條の憲法と定めり。
同十四年太子三十五歳ふ成らる。今年七月天皇太子と諸して勝鬘經と講せ
しり。太子袈裟と被塵尾と握獅子の坐ふの經と講し。講了て天
蓮華と雨に帝歡感斜る。即ちその地ふ伽藍と建する。同十月勅して
法華經と岡本宮ふ於て講せし。播州の莊田一萬畝とて以て施物とす。太子納めり
法隆寺の産し。是年諸列小命とて池と掘渠と開き屯倉と置て以て凶年の

備^{そま}て^しの^り。同二十年百濟國より味摩之と^{ひまのち}る人素朝^{ひまのち}と^で呉國の舞樂と^{ぶが}奏^まれ。
 太子吾朝^{みけ}の國人^{こじん}と^こ之^を習^まら^せら^る。同二十七年己卯年。太子四十八歳^{よんじゅうはち}の^り。
 畿内諸國小命^{きないしよこ}ぞ^と國々小寺院^{こくごくせういん}と^と造^たせ^られ^り。寺地^{てらぢ}も^もよ^の地^ぢと^と賜^{たま}ら^る。
 材^ま木^きと^と惠^{めぐ}み^られ^り。今年^{ことし}も^もく^く造^た功^{こう}あ^らる^り。由國^{ゆこく}々^々より^{より}祈^{いの}ぐ^れば
 一々巡覽^{じゆんらん}師^し子^しを^をて^て正月^{しんげつ}上旬^{じやうじん}彼驪馬^{ひりま}を^を召^まさ^せ。侍臣^{じしん}と^と俱^{とも}に^に諸國^{しよこく}と^と一^{いつ}らん
 した^し。介^かして^{して}後河内國科長^{ごわにこくちやう}を^を赴^まり^りせ^られ^り。百濟國^{ひやくせいこく}より^{より}来^きり^りたる^{たる}墓^ぼと^と土師^{どし}
 連^{れん}を^を附^つく^く。此處^{こゝ}あ^らひ^ひて^て我^{われ}為^を小墓^{せうぼ}と^と築^たぐ^くべ^い。我世^{われよ}と^と去^さ支^し久^く一^{いつ}ず^ず。墓^ぼの^り
 小^{せう}二^にの^り床^{とこ}と^と設^たぐ^くべ^い。一^{いつ}の^り我^{われ}床^{とこ}一^{いつ}の^り妃^きの^り床^{とこ}と^と一^{いつ}々^じ指^さ図^ずし^て斑^{はん}鳥^{てう}宮^{みや}を^を還^{かへ}ら^せ
 り^り。同二十八年庚辰^{かうじん}の^り。太子四十九歳^{よんじゅうきゅう}成^なり^り。既^{すで}に^に去^さ年^{ねん}より^{より}以^も未^も病^{びやう}を^を卧^ふ
 たり^り。御心^{おんこゝろ}より^{より}一^{いつ}と^とも^も。三月三日^{さんげつさんじつ}の^り聊^{りやう}御^{おん}快^{くわい}く^くを^をせ^られ^り。群臣^{ぐんしん}御^{おん}子^し達^{たつ}と^と俱^{とも}に^に
 参^{さん}拜^{はい}し^て曲水^{まがみづ}宴^{えん}と^と勸^{すす}め^られ^り。奉^{ほう}じ^ての^り同二十九年辛巳^{しんし}の^り巳^しの^り二月五日^{にがつごにち}或^{ある}廿二^{にじふに}日^{にち}癸巳^{みづのへ}日^{にち}太子^{たいし}
 恒^{つね}も^も快^{くわい}く^く渡^{わた}り^りを^をせ^られ^り。晚^{ゆふ}も^も及^{およ}び^び沐浴^{みよく}を^をせ^られ^り。妃^きも^も同^{どう}沐浴^{みよく}と^とつ^つと^とせ^せ参^{さん}拜^{はい}新^{しん}死^し

御衣^{おんぎ}と^と召^まさ^せら^る。一^{いつ}猶^{なほ}て^て寢殿^{しんでん}に^に入^い席^{せき}と^と双^{ふた}て^て卧^ふり^り。然^{しか}る^るに^に小翌朝^{せうよくあさ}皇太子^{かうたいし}。妃^きと^と俱^{とも}に^に
 曾^そて^て起^おき^きせ^られ^り。侍臣^{じしん}の^り人^{ひと}々^々殿^{でん}の^り御^{おん}戸^こと^と聞^きき^き見^み奉^{ほう}り^り。太子^{たいし}並^{なら}び^に后^{こう}。忽^{たち}然^{ぜん}と^とて^て眠^ね
 う^う如^{ごと}く^く薨^{こう}と^とせ^られ^り。今^{いま}年^{ねん}御^{おん}齡^{ねい}五十歳^{ごじゅうさい}前^{まへ}代^{だい}未^も聞^きの^り事^{こと}も^もあ^らる^り。侍臣^{じしん}大^{だい}小^{せう}周^{しゅう}章^{ちやう}し^し皇
 太子^{たいし}の^り御^{おん}子^し山^{さん}脊^{せき}の^り大^{だい}兄^{けい}王^{わう}小^{せう}曆^{りき}王^{わう}昔^{せき}手^て女^{にょ}王^{わう}手^て嶋^{じま}女^{にょ}王^{わう}御^{おん}孫^{そん}君^{きみ}の^り未^も呂^{りよ}女^{にょ}王^{わう}難^{なん}波^は女^{にょ}王^{わう}
 子^し削^{せつ}王^{わう}佐^さ保^ほ女^{にょ}王^{わう}三^{さん}嶋^{じま}女^{にょ}王^{わう}甲^{かう}可^か王^{わう}御^{おん}弟^{てい}の^り殖^{しょく}栗^{りき}皇^{かう}子^し茂^{もう}田^{でん}皇^{かう}子^し悉^{しつ}く^く集^あり^り。手^ての^り舞^{まひ}
 足^{あし}の^り踏^ふ所^{ところ}と^と忘^{わす}れ^りて^て愁^{しゆ}傷^{やう}を^をい^い。且^{かつ}帝^{てい}の^り御^{おん}歎^{たん}を^を一^{いつ}々^じと^とい^い。復^{また}我^{われ}馬^ま子^しと^とい^い。群^{ぐん}御^{おん}燈^{とう}と^と
 矢^やと^と如^{ごと}く^く。迹^{あと}見^み赤^{せき}檮^{しゆ}荼^た河^か勝^{しやう}が^が哀^{あは}れ^れ声^{こゑ}耳^{みみ}を^を満^みす。都^{みやこ}の^り内^{うち}ハ^ハ言^{こと}も^もあ^らる^り。畿^き内^{うち}遠^{えん}境^{きやう}の^り民^{たみ}
 此^{こゝ}と^と聞^きる^る者^{もの}父^{ちち}母^{はは}の^り別^{わか}れ^れの^り如^{ごと}く^く歎^{たん}悲^ひし^しと^と言^{こと}は^はる^り。市^{いち}中^{ちゆう}に^にて^ての^り物^{もの}と^とあ^らる^り。
 高^{たか}戸^この^り業^{わざ}と^とや^やめ^め。農^{のう}民^{みん}耕^{かう}夫^ふ耕^{かう}を^をせ^らる^り。春^{はる}米^{まい}者^{もの}ハ^ハ杵^{きね}と^と落^おち^ち。行^ゆ人^{にん}ハ^ハ道^{みち}を^をま^まり^り。
 皆^{みな}声^{こゑ}々^々あ^らる^り。今日^{けふ}既^{すで}に^に小^{せう}月^{げつ}日^{にち}の^り輝^{ひかり}と^とい^い。天地^{てんち}崩^{くづ}れ^り。如^{ごと}く^く此^{こゝ}後^{のち}何^{なに}と^と特^{とく}と^とせん。
 悲^{かな}し^し容^{よう}形^{がた}ハ^ハむ^む。釋^{しやく}尊^{そん}入^に滅^{めつ}。涅槃^{ねはん}の^り雲^{うん}を^を隠^{かく}ま^ます。其^{その}号^{ごう}ハ^ハ斯^しと^とい^い。雙^{すわう}の^り棺^{くわん}
 柩^{くわう}と^とい^い。太子^{たいし}及^{およ}び^び妃^きの^り遺^い骸^{がい}と^と抱^{かか}り^り。お^おろ^ろく^く棺^{くわん}中^{ちゆう}に^に藏^{かく}め^め奉^{ほう}ら^んと^とい^い。小^{せう}御^{おん}容^{よう}貌^{ぼう}

河内國科長
御墓の圖

御墓山ハ河内國石川郡
太子村ヤウノ磯長山敷福寺
と号シ俗上ノ太子と号シ
痛内ノ中央ハ皇太子ノ
御母穴徳部間ノ皇后
東ノ方ハ皇太子西ノ方ハ
太子ノ后 膳ノ大娘
都合三箇ノ石棺と藏ビ
故三骨一痛と号シ



御屍の香ぐらと云限る。御屍の輕きと衣服とよりりも程
 同廿日小河内國科長河内國石川郡科長山又ハ御墓山也の御墓稱も今上の太子と号はせられたりに奉る。既小
 墓ニ命命も今上の太子と号はせられたり去年より以來土師連御墓と造り中中ハ二の石の床と双今年正
 月小成就同二月小葬奠と送り御墓小収り参らるると意てハ其期を知
 召れる故り誠小喪典と送り奉る光景光景ハ天子の象輿と送り小齋
 大臣以下上御太子の御弟王子ハ麻の鞋と召させぬ前後左右小陪從
 各雜華を擎け諸の釋衆ハ梵唄と讚華と雨ハ奉る既小御葬の夏陽遠
 遠迫ハ貴賤巷あら喪服と着香と焼声と放つ哭哭ハ天皇
 も此世の限ると思召れ遙遙ハ高ハ登り遠遠ハ殿覽御衣と只管
 絞絞ハ御墓小葬奉奉ハ後ハ邊鄙の民ハ未集集ハ五十余日の間
 毎日小御墓の周圍と巡りて悲然ハ不平愛愛ハ乘り甲斐の驛馬ハ
 太子薨れ薨れハ日日ハ悲鳴悲鳴ハ更更ハ水草水草ハ喫喫ハ奉奉ハ時時ハ喪典喪典ハ左左ハ方方ハ

引引ハ御墓御墓ハ連連ハ棺棺ハ榔榔ハ収収ハ奉奉ハ時時ハ鳴鳴ハ一一ハ色色ハ即即ハ日日ハ忽忽ハ死死ハ
 こそ不思議不思議ハ往昔楚國の項羽項羽ハ乘乘ハ鳥鳥ハ錐錐ハ馬馬ハ項羽項羽ハ鳥鳥ハ江江ハ陳陳ハ没没ハせし
 時悲悲ハ鳴鳴ハ忽忽ハ水水ハ中中ハ死死ハせり項羽ハ所謂暴惡の將たり然れども平小馴て
 愛愛ハ蒙蒙ハ思思ハ忘忘ハ主主ハの死の死ハ悲悲ハ死死ハせり況や皇太子ハ天下の大仁本朝の
 聖人聖人ハ畜畜ハ類類ハ死死ハ不不ハ殉殉ハ参参ハ支支ハ誠誠ハ不不ハ感感ハ小小ハ堪堪ハ又又ハ此此ハ時時ハ
 奇異奇異ハ葬葬ハ奉奉ハ日日ハより五十日一一ハ異異ハ鳥鳥ハ來來ハ御墓御墓ハの上上ハ小小ハ樓樓ハて
 去去ハ形形ハ鵲鵲ハの毛色白く諸人何鳥と云毛色白く諸人何鳥と云毛色白く諸人何鳥と云毛色白く
 來來ハ迫迫ハ時時ハ遠遠ハ追追ハのけ供物供物ハの類の類ハ諸鳥諸鳥ハ神神ハ妙妙ハ守守ハ時時ハの人これと
 見て守墓鳥守墓鳥ハ三年三年ハの後の後ハ何方何方ハ去去ハ曾曾ハて再再ハ來來ハ今今ハの世の世ハ入入ハ空空ハ室室ハと独
 守守ハ寂寂ハ莫莫ハ住住ハ居居ハ守墓鳥守墓鳥ハ此此ハ由由ハ縁縁ハ諸諸ハ又又ハ高高ハ麗麗ハ國國ハの僧の僧ハ惠惠ハ慈慈ハ法法ハ
 師師ハ去去ハの二十三年十月二十三年十月ハ本國本國ハ小小ハ啼啼ハ今今ハ般般ハ皇太子皇太子ハの薨薨ハ由由ハ
 大大ハ悲悲ハ本國本國ハの僧の僧ハと集集ハ齊齊ハと設設ハけ自讀讀ハ經經ハ一一ハ左左ハ右右ハの人誓誓ハ上上ハ宮宮ハ太

子日本の聖人なり。斯る聖徳と具足して粟散邊鄙の小國小生れぬものなく。全く佛法と東土を私りぬるを権化の再生なり。故に三皇と尊敬し。万民と救ひぬ。我異國小生るとして宿縁の深き所謂あり。彼國小なり。朝暮教とつけ。断金の交りともや。我独生るとして天下の間小此後永く知音あり。我末年二月五日ハ太子遷化の周期あり。此日小死して必らば上宮太子と浄土小遭奉り共衆生と化度とべし。果して誓ひ言に違ふべ。翌年二月五日小當り齊戒沐浴し寂然殊勝ふして歿たり。高麗の人の言ふ。上宮太子独聖たり。非び惠慈も又聖たりと云ふ。此事後小我國聞え聽人數感りたりと云

三國七高僧傳圖會附録卷終

聖德皇太子廟内碑石偈

大慈大悲本誓願。愍念衆生如一子。是故方便從西方。誕生片州興正法。我身救世觀世音。定惠契女大勢至。生育我身大悲母。西方教主彌陀尊。真如真實本一體。一體現三同一身。片域化緣亦已盡。還歸西方我淨土。爲度末世諸衆生。父母所生血肉身。遺畱勝地此廟窟。三骨一廟三尊位。過去七佛法輪所。大乘相應功德地。一度參詣離惡趣。決定往生極樂界。松子傳曰太子嘗入磯長廟内記。囑于碑石松子倍從親見之云云。

又天喜二年九月二十二日僧忠禪建塔於磯長廟側掘基得碼碯石二枚石上有文曰吾為利生出彼衡山入此日域降伏守屋之邪見終顯佛法之威德於處處造立四十六箇之伽藍化度一千三百餘僧尼製記法華勝鬘維摩等大乘義疏斷惡修善之道漸以滿足矣今年歲次辛巳河內國石川郡磯長里有一勝地充足稱美故點墓所已畢吾入滅以後及四百三十餘歲此記文出現哉爾時國王大臣發起寺塔願求佛法耳此石現在磯長叡福寺世曰碼碯石識文具出叡福寺記

皇都

清水葵齋書

浪華

松川半山畫

京都彫匠

一之卷 二三四卷 五之卷

井上治兵衛 甲賀喜市郎 樋口與兵衛

安政五年午十二月官許
萬延元年申五月鑄梓

六角通鼓屋町東上

小川多左衛門

寺町通松原下

勝村治右衛門

御幸町姉小路上

藤井孫兵衛

知恩院古門前

澤田吉左衛門

三條通寺町西入

山中善兵衛

花屋町西洞院西入

永田調兵衛

五條橋通高倉東入

澤田友七郎

油小路奥之店下

川波宇助

東六條下珠數屋町

西村九郎右衛門

平安
書林



